明治二十六年十二月廿五日發行

THE HOME JOURNAL

家庭雜誌

東京家庭雜誌社發兌

定價全五錢

每月二回



第貳拾號

『エマルソン』……北村門太郎
『頼山陽』……德富猪一郎
『瀧澤馬琴』……塚越芳太郎
『新井白石』……山路彌吉
『トルストイ』……德富健次郎
『近松巣林子』……塚越芳太郎
『ユーゴー』……人見一太郎

毎月出版

平民叢書

毎月一回發兌
十冊完結
紙數百五十頁

平民叢書第一巻
十九世紀之大勢
定價拾貳錢
郵税貳錢

平民叢書第二巻
世界經濟上之變動
定價拾貳錢
郵税貳錢

平民叢書第三巻
國家と政府
定價拾貳錢
郵税貳錢

平民叢書第四巻
教育と遺傳
定價拾貳錢
郵税貳錢

平民叢書第五巻
文明之弊及其救治
定價拾貳錢
郵税貳錢

平民叢書第六卷
現時之社會主義
定價拾貳錢　郵税貳錢

平民叢書號外
銀貨之過去現在未來
定價拾錢　郵税貳錢

平民叢書第七卷
經濟と道德
定價拾貳錢　郵税貳錢

平民叢書第八卷
歷史攻究法
定價拾貳錢　郵税貳錢

國民叢書
人物管見
定價拾五錢　郵税四錢

國民叢書
青年と教育
定價拾五錢　郵税四錢

國民叢書
靜思餘錄
定價拾五錢　郵税四錢

第一
國民小說
定價拾五錢　郵税四錢

第二
國民小說
定價拾五錢　郵税六錢

第三
國民小說
定價拾五錢　郵税四錢

櫻痴居士福地源一郎著
再版
幕府衰亡論
定價三拾五錢 郵税六錢

竹越與三郎著
七版
新日本史 上
定價四拾錢 郵税六錢

竹越與三郎著
再版
新日本史 中
定價三拾錢 郵税六錢

德富健次郎著
近世歐米
歷史之片影
定價貳拾錢 郵税四錢

人見一太郎著
國民的大問題
定價貳拾錢 郵税四錢

人見一太郎著
第二之維新
定價拾錢 郵税貳錢

ゼームスブライス著 人見一太郎譯
平民之政治
全二冊定價四圓
特別貳圓五拾錢

高橋五郎著
排僞哲學論
定價拾貳錢 郵税貳錢

國民之友春期大附錄

一月十三日第貳百拾四號に添ふ

老友平野知秋が性行及び劇評　學海居士

靈彩奕々、同情同感の念は、簡潔老實の筆端に溢る、近來の大文字なり。

未定　落合直文

婉曲にして崇高、優美にして悲壯、神韻裊々として、人の懷に入るもの豈豫想するに難しとせんや。

千島大尉　弦齋居士

一篇快筆縱橫、奇想全幅を掩ふ。最悽慘の劇、千波萬波を起し來つて、終に後の疑問に達す、疑問、抑も何の疑問ぞ把つて讀め。

新聞實歷談　櫻痴居士

是は櫻痴居士が維新の初に江湖新聞と題せるを發兌し、頻に維新の帝政に反對の説を唱へ、薩長代りて第二の幕府たるべしと論じたる等の事よりして縛せられて、獄に繫がれたるに初まり、其後居士が歐米より歸朝の後、時事に感ずる所ありて、斷然冠を挂て官を辭し、東京日日新聞に從事し、爾來十餘年」、その新聞に關係せる間の事を叙述し、新聞の內幕秘密を顯はせる實歷談なり。固より「居士獨得の長技。

此印刷高數萬部に超ゆ、廣告依頼者は、來一月五日までに、御申込あらんことを望む。

發兌元　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

明治二十六年十二月廿五日發行

家庭雜誌第貳拾號

目録



家庭雜誌第貳拾號

（明治二十六年十二月廿五日發兌）

社説

歳暮の家庭

暮れ行く歳を悲しと云ふは、未た物の道理を考へぬ話なり。清き生活をなす人には、昨日も樂しく、今日も樂しく、明日も亦た樂し。

心にも疚しきとなく、人にも怍る所なし。今年の始めに企てたるとは、今年の終りには成就し、今は悔むともなけれは、憾むともなし。唯た天の恩寵を感謝し、此上なから淸福を祈るの外なけむ。吾人は我邦の總ての人の歳暮がかくあらんとを願ふなり。

人は母の胎内を出てゝより墳墓の中に眠る迄、皆それ〴〵の職分あり、老人には老人相應の職分あり、小兒には小兒相應の職分あり。されは老たるも、壯なるも、幼なきも、各その職分を怠らす。親子、夫婦、兄弟、姉妹、一家召使の末に到る迄、睦ましく、親しく、面白く、樂しく、日を送り、又た日を送り、遂に何時の間にやら、歳の暮になり行くなり。斯くて歳を送る、洵に此上もなき淸福なり。吾人は我邦の總ての家庭の歳暮か、斯くあらんとを願ふなり。

如何にして歳を送る可き。小女は新衣を裁す可し、小童は紙鳶を用意す可し。家の障子も張り換ゆ可し、竈の下も掃除す可し。新らしき細君は、一年の經算に忙はしく、老ひたる翁は、梅花の鉢植を飾りて餘念なし。恰も『時』てふ長き道をは、老幼長少、相共に手を引き合ふて旅行をなし、日暮れたれは一同旅店に泊り、足を憩へ、肩を休め、湯に浴し、食事をなし、是迄たどり來りし道筋を按し、此れより行かねはならぬ前途を

想ひやり、樂しくも、勇ましくも、甘き夢を結つゝ、明日を待つか如し。吾人は總ての家庭の歳暮か、斯くあらんことを願ふなり。

『昨日といひ今日とくらして飛鳥川、流れてはやき月日なりけり』とは、昔しの人の述懐なり。月日の立は、速けれとも、さりとて別段悲しき理由もなし。一日の職分を一日に終り、三百六十五日の職分を三百六十五日にて終れは、我か心も何となく凉しくなり、天地に對しても、申分なき心地こそすれ。斯くあらは吾人は寧ろ月日の速かに立つこそ願はしけれ。恰も旅行者か、一歩にても先きに行き、一里にても速かに進まんことを望むか如くに。

看よ小兒は、追々と生長するにあらすや。青年は追々と壯者となるにあらすや。小女は追々花嫁となるにあらすや。老翁には老翁の樂あり、老媼には老媼の樂あり。滊車に乘して勢田の長橋を渡れは、一入の眺めあり。濱名の湖に進めは、又た一入の眺めあり。富士川より、御殿場、箱根山中より品川に到る迄、滊車の轉する毎に、其の眺めも變する如くに。飴を含んで孫を抱くの樂は、老媼にあらされは解する能はす。家門の繁昌を樂むの樂みは、老翁にあらされは知る能はす。斯く觀來れは吾人は歳を送るの樂みを見るのみ。

今年なすこともなく、明年なすこともなく、勉强もせされは、勞作もせす。目的もなけれは、意味もなく、唯た浮々と月日を送り、歳の暮れに到りて驚き、驚きつゝ又た浮々と歳を送り、『時』に向ひ多くの負債を拵へ、その重荷に壓せられて死するものこそ、憐れなる者の中にて最も憐れなるものそかし。『來年は來年はとて暮れにけり』、斯る人は少壯の時にてさへ悲しみ多し、まして老は後悔と共に、追々と積み重なるに於てをや。

淸き生活は、樂しき生活也。一日淸き生活をなせは、一年亦た淸き生活となる也。一年淸き生活なれは歳暮

も亦た樂しき歳暮となる也、一生涯も亦た樂しき一生涯となる也。

史談

佛國革命の花

（ローラン夫人の傳）（二）

四歳にして書を讀むことを知り八歳にしてプルタアークの英雄傳を讀みて千載の前に生れざりしを嘆ける此少女は、十一歳にして尼庵に入り一年の間宗教上學問上さま〴〵の修煉を積みたり。此尼庵にありし間に、彼女はソフイー、カンヂーなる一少女と相識り、其心に聚れる愛情を友の上に注ぎて、一たび相別るゝや間斷なく書信を往復し、或は夜半に起きて書を認め、其友の書翰は絕へず衣兜に藏めて時々出し讀みては自ら慰むるなど、宛なから初戀の夢濃やかなる少女の如くなりき。

一年にして尼庵を出で、更に一年を祖母の家に送りて然る後父母の家に歸り、一半は讀書一半は家事の手傳に日を送りぬ。文學上の著作にて尤も嗜讀せる所はタツソーの詩、トムソンの詩、フェヌロンの論文、プルタアークの英雄傳等にして、古今の歷史、天文學、性理學、數學、哲學等も好むで讀みぬ。如斯く當時の少女には珍らしく學問に富みたる少女も、謙遜にして情深く人にやさしかりしかば、家族知人皆擧りて之を愛し、斯くて彼女は慈母の愛の下に、古賢今哲の書卷の中に、或時は庖廚に母を助け、或時は父母に伴ふて巴里郭外の村落に遊び、斯る平和の生涯の中に幾年か平和の歳月は過ぎ行きぬ。

如斯く外界の生涯は尤も平和に過ぎ行く間に、彼女の精神は一大革命を來しぬ。嶄々の岩猶清水を通わす如く、當時次第に佛國に漲り來れる政界の革命に前立つ

思想の革命の氣運は、何時の間にか此平和なる家庭の戸隙より忍び入りて、感覺神經の極めて敏なる彼少女に憑り、人知れず異日の革命の一動力を此間に養成せり。多く書を讀みて深く物事を考ふる彼女は、何時しか遺傳權威習慣などを重んずる事を打棄てゝ、何事にも自家獨立の判斷批評を下し始めぬ。革命は先づ宗教より起りぬ。彼女は十字架を信ぜざる者及之を知らざる者は皆永遠の刑に入るとの教義に躓き、一關已に陷りて信仰の城塞は見る〳〵破れ終り、基督教其ものも已に疑はしくなりぬ。彼女は牧僧の勸に任せて諸の基督教證據論を讀みぬ、彼女は亦諸の理學者懷疑派の著作を讀みぬ、而して火は水の爲めに消へ果てたり。斯くの如く彼女は已に信仰を失ひたるも、宗教の形式を棄つれば慈母の懷を傷めんことを恐れ、家族に惡例を示さんことを憚りて、教會に赴くとを廢せざりき。大凡そ信仰を失ふ者は多く苦み哀み迷ふものなれども、彼女の基督教より自由思想に移つるや少しも苦痛煩悶の形迹あることなし。蓋し道理の否定する所は設令如何なる事たりとも一毫の猶豫もなく之を擲ち去て顧みざるは、彼女の一特質なりき。然れども一の注意す可きことは、彼女已に宗教の形式教理を打棄てたるも、一種宗教的理想は常に冥々の間に彼女の導燈となりしこと是なり。後來彼女が纖弱なる一婦人の身を以て百難の間に些も擬議せず、死生の間に處して泰然として毫も亂れず、黑暗々たる佛國大革命の洞中に燦然たる光を放つて殉道者の如き死を遂げたるを見るも、苟くも天命を知り天命に安ずる者にあらずんば焉ぞ如斯くなるを得むや。

セントピエールと共に自然崇拜者となり、ルーソーと共に主觀的思想家となり、プルタークを讀むでは希臘羅馬の共和政治に心醉し、英國憲法を學び太西洋の彼岸に新に勃興せんとする北米聯邦の發達を注目しては、常時

佛國に於ける幾千百の靑年の腦中に浮み出でたる共和政治の簡易正義道德就中平等自由を愛するの一念は彼女の心に滿ち、彼女は夙に共和論者となりぬ。「生前若し政府を撰むの權を與へられたらんには、余は素より共和政體を撰まん者也」とは二十歲の時彼女の記せる所なりき。然れども彼女の同情は斯く夙に共和政に傾きたるも、王政の下に生れたる彼女は猶王家の忠實なる臣民として聊かも謀叛心を懷くことなく、路易十六世の位に即くや彼女は新王の即位と共に政も一新して人民幸福の日を見ることある可しと希望せり。抑も亦平民平等を理想せる彼女も必ずしも一般平民を以て教育あり門地ある者に匹敵す可きものとも思はざりしは明らかなる事實にて、巴里の市民が刑に就く人を見んとて眞黑に立寄れるを見ては彼女は「集めて見れば人間も眞にイヤしきものなり」と慨嘆し、千七百七十五年麵包一揆の起りし時も彼女は政府の政略を好とし人民は性急に過ぎたりと咎めたり。王政に對する彼女當時の考は實に如斯くにして、其同情は素より共和政に傾きつゝも、王政の下到底斯る夢想を實行し得可しとは思はざりしなり。誰か圖らむ、其遙かなる理想は數年の間に革命の翼に乘りて思ひかけなく眼前に飛來せむとは。誰か圖らむ、思ひしよりも早く來りし革命は亦思ひしよりも遠く行き過ぎて、彼女自から其狂瀾怒濤の犧牲とならむとは。

斯りし程に彼女は人生の一大恨事に遭逢せり。一家の光として賴み賴まれ愛し愛せられたる彼女の母は、中風の爲めに逝きぬ。彼女は此打擊の爲めに烈しき熱に罹り、久しく死生の途上を來往せしが、纔かに癒て、是れより數月の間はいよ〳〵引き籠りつゝ獨り哲學上の論文など書きて餘憂を遣れり。斯くて過行く間に、父の財政の都合よからず、殊に母を喪ひてよりは家も面白からざれば、父に計りて家を出で幼時曾て寄宿し

たる尼庵に入りぬ。
是れより先き彼女の家にあるや、求婚せる男子少からざりしも黜けて一も容れざりき。其中にブランセリーなる一青年文學者あり。是れ人の爲さゞる事をなして一擧名聲を釣らむとする冒險的文學者の一人なりしが、彼女は不思議にも自家理想の色彩を以て此人物を彩どり、是れこそ眞に希臘羅馬の世にもある可き男子なりと思ひ入りて、父の結婚を拒絶せしに拘はらず、窃かに彼男の將來再び來りて求婚せんことを希望しつゝ、しば〳〵彼に嫁せずんば一生何人にも嫁せずと言へり。然るに一日ルキセンブルグの公園を散歩するとて彼れランセリーに逢ひしに、彼男其帽子に一の羽を飾り居たりければ、斯る瑣屑の事は共和的質素、嚴重の德義、高尙の思想ある者の爲す可からざる所なりとて彼女の戀は頓に醒め、加ふるに其男は其社會に於ては「一萬處女の情人」との譯名ある男なりと聞くに及びて彼女は全く其夢より覺めぬ。斯りし程に彼女はローラン、ド、ラ、プラチエーに逢へり。
ローランは里昂近傍の人にて、全く獨自一己の力にて自家の運命を造りし人なり。十九歲の年家族と喧嘩して家を出で、亞米利加に行かんとして徒步にて佛國を横ぎりルーエンに着せしに、此處に一親戚の製造物監査官となれる者に逢ひ、其下役となりて次第に進み、其未來のローラン夫人に初めて逢ひたる時は、彼は己にアミーンズの製造物監査官となり、商業及製造業上の問題に關する有益なる書籍の著述家として佛國實業界に姓名籍々たりき。彼は廣く旅行し、多く書を讀、嚴しく誠實にして物事に精細に、尤も方正にして亦自信矜氣强く、儀式作法を嫌ひて、其衣服風采擧動は質素過ぎて田舍漢の風あり。是れ俗流の喜ばざる所にして、尤も彼の學問を好み共和を夢想せる少女の喜ぶ所なりき。ローランも亦深く彼女を喜べり。相識るの後

殆なくローランは瑞士、意太利地方を遊歴し、其旅行記を書翰の躰に綴りて、彼女の名を指して寄せぬ。如斯く彼等の間には久しく已に敬重の念醸されたり。十八ヶ月の後ローラン巴里に歸るや、あらためて求婚の申込をなせり。此は前に云へる如く、彼女が父の家を出で丶尼庵に貧困の生活を立てたる時の事なりき。彼女即ち之を諾し、父亦之を許し、ローラン四十五歳マノン二十五歳と云へる千七百八十年の二月結婚愈滯ふりなく濟みて、マノン、フイリポン孃は將來此名を以て世に轟く可きローラン夫人となりぬ。

科學

冬の生命（上）

天地皆な五彩の錦もて包まれたる最も美はしき秋の日も木枯に吹き拂ひ去られ、冬も既に半にはなりにけり。



『霜がれはそことも見へぬ草の原誰にとはまし秋の名殘を』。冬の日の寂しさまた事新らしく說き立つるまでもあらず。草も木も枯れたる如くなり、獸、蟲は穴に隱れ、人は炬燵に集ひて陽氣の早く歸り來らんことをのみを待つ。されど地上にありとあらゆる生物の中には此の時を得顏に發育するものもまたなきにあらず。さらは此より少しく此の種類の植物に付て說き試みむ。

冬の日に生育をなす植物とは、常盤の色を變へぬ松柏の類、千代も動かぬ岩を包む葛蘿の類にもあらず、此等のものは冬の最中にも葉の色は變へされど、生長をなし得るものにはあらず。或はまた春の日を待つて咲かんとする梅櫻にもあらず、また『冬こもりせる草も木も春にしられぬ花そさきける』と歌人の詠みたる雪

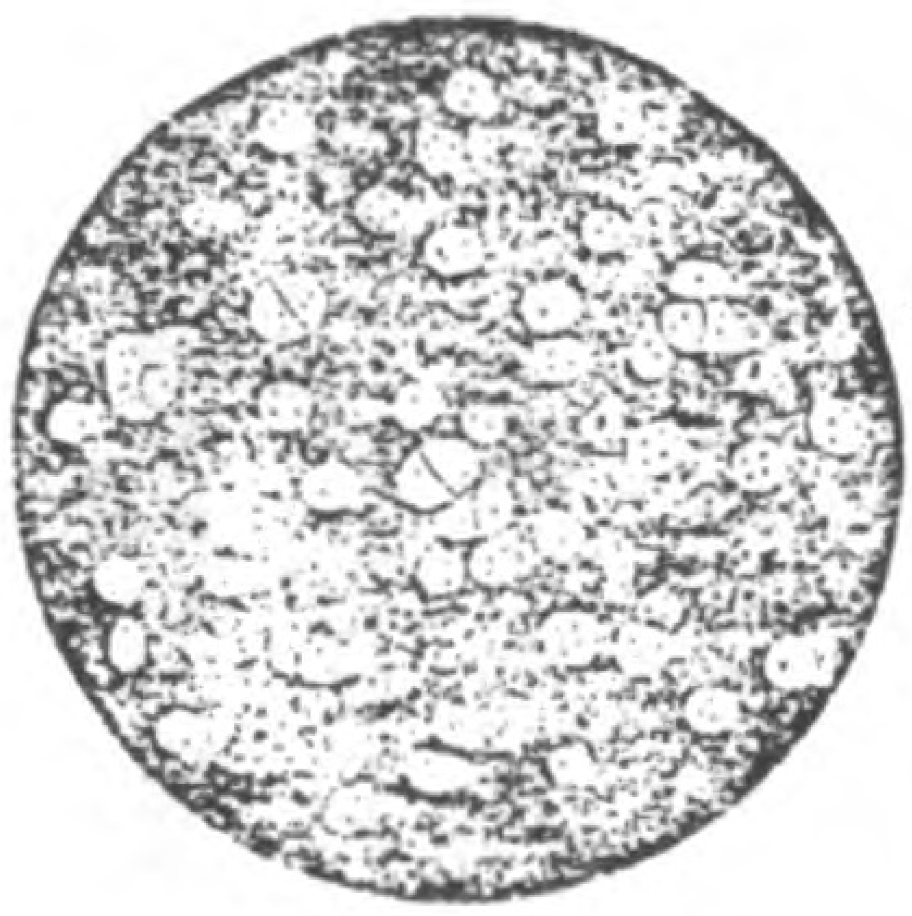
の花さもあらず。或はまた新しき珍らしきものにもあらず、人々のよく知れる苔と云ふものなり。彼等は霜にもめげず、雪にもめげず、濕氣と雨氣とを喜び、秋の日の過ぎ去ると共に著しく生長し始め、森の徑路を蔽ひ、木の根に蒸し、濕地の水を吸ひ、柔かき綠の上衣をもて死したる壁や岩を包む。

今や其の時となりぬ、彼等は森の中に充ち滿ちたり。細く長く木の枝に懸るものは美はしく梳りたる髯の如く、樹に集まれるものは五色の紋形の如く、道に敷けるは鮮やかなる段通の如く踏むも惜しき心地せらる。冬を待つて生長する此等の草を一概に苔と稱すれど、其の中には眞の苔とかび草（假りにかび草と稱す專門の植物學者は特に與へたる名を有すれども生硬を厭ひて假りにかくは名付たり）と稱するものとの二つあり。かび草と稱するは專門の植物學者ならでは之を植物の列に加ふることと思ひ寄らさる程に奇なるものにて、其の一個一個は初學の者には、顯微鏡の力を藉りてすら研究するに苦しむ程に微なるものなれども、少しく注意するものは容易に其の群を認識するを得べし。我等が普通に苔と稱するもの丶群がり生ずる處には常に灰綠色のもの苔と共に群がり生ずるを見る、之れ則ち爰にかび草と稱するものにして、左に圖したる如きもの丶幾千となく幾萬となく相聚り相重なりたるなり。



此の奇怪なる植物を少しく研究せんと欲するものあらば、彼の心は先づ一の疑問を喚ひ起し來るべし、如何にして此の細微なる植物は、彼等よりも、大に彼等よりも強き同類か或は枯れて地に落ち或は漸くにして生を有ち得る冬の最中によく生長しよく發達し得るかの疑問を先づ喚び起し來るべし、これ實に最初の疑問にして長き間專門の植物學者の頭腦を惱ましたる最難の疑問なりき。普通のものゝ眼に取つては、形さへも備へたるか備へさるか判らかならさる此の植物が生命あるものなりと想像するさへ不思議の至りなり。

此等の奇妙なる冬の生命を研究するに當り、我等をして先づ雨水の溜に生ずる綠色の垢の如きものを取り來り顯微鏡の魔力の下に置かしめよ、只だ看る顯微鏡面は一面に小さく圓き綠色の細胞を以て充たされ、其の中の稍々長きものは、小さき魚の游泳くか如く彼方此方に甚た迅速なる運動をなす。これ則ち植物種屬中の最も單純なるものにして、其の構造は生命ある小さき袋たるに過ぎず、其の中に含有する核の力によつて水及ひ瓦斯を吸つて營養をなし、かくて生活し、かくて生長し、かくて蕃殖す。



綠色單細胞植物生長して分身す

廣き世界には此の單細胞植物の種類もまた甚た尠なからず。大道徑路の濕氣ある處に於て、雨水の滯留せる處に於て、池に於て溝に於て、泡沫霏々として飛ぶ瀑に於て、滔々汨々として流るゝ河に於て、高き山頂の冷泉に於て、到る處彼等を見出すを得べし。彼等の或ものはもつれたる絲の如き形をなし、流るゝ河の水に

梳られ、或ものは黄、紺碧、深緑色の塊をなし小さき邸園の池に漂ふ如く、高きヒマラヤ山の沼にも漂ひ、或ものは到る處の濕地に於て緑色の細粉となつて木の枝とも云はず幹とも云はず岩とも云はず土とも云はず總てのものを被ひ、或ものはまた其の靜止せる時に於て紅色を呈し、一刻にして濕氣ある家の壁を被ひ一面に鮮血色とならしめ、屢々伊太利の農夫を驚かして聖露と名づけられ、或ものは北極地方の雪の上に生ひて赤雪と名つけられ、或るものはまた光澤ある結晶躰のうきものとなり、熱帶地方の温泉にある岩に附着し、北氷洋に漂ふ氷山をも被ふ。

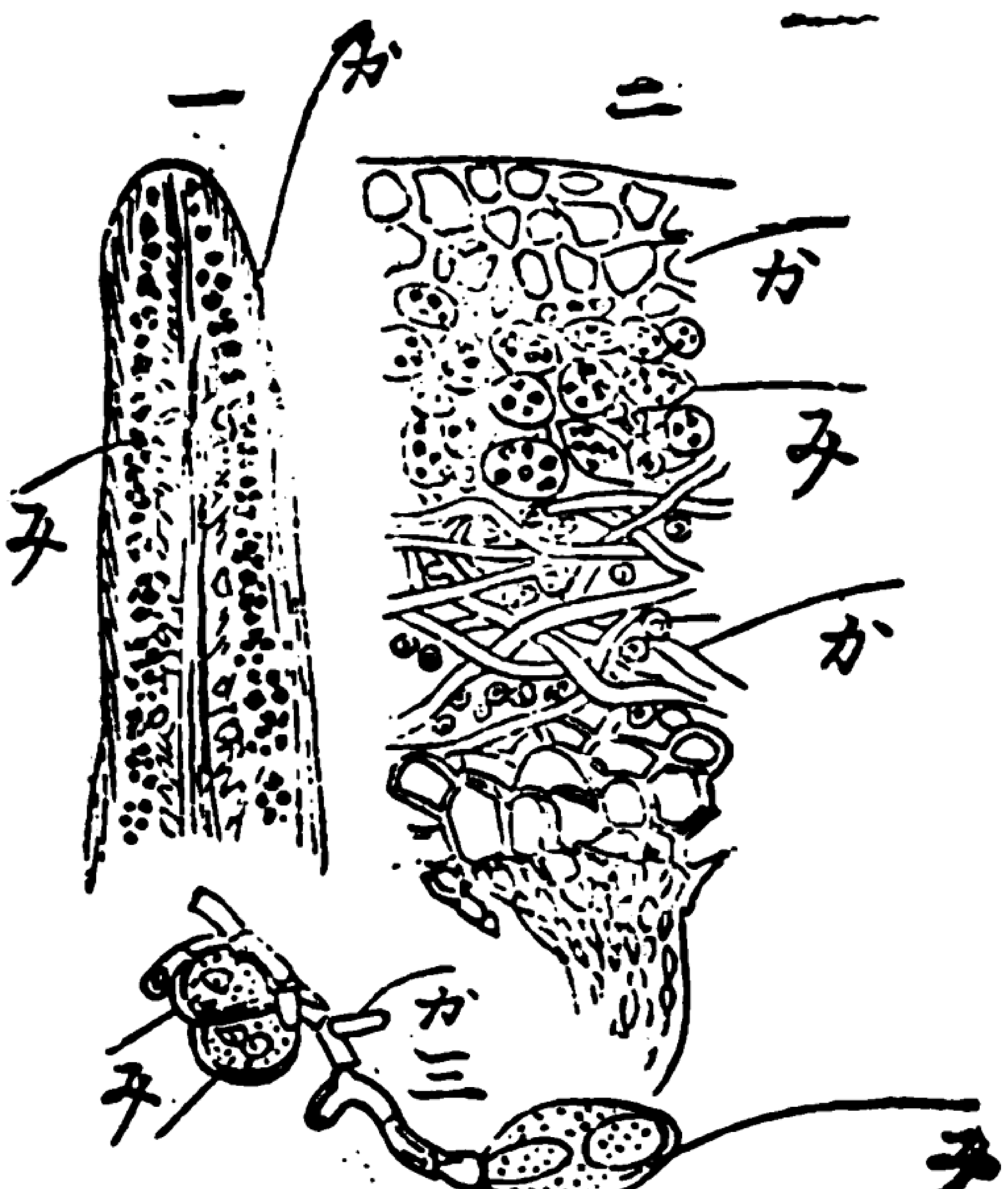
此等の最下等植物は他の植物の如く根の力によりて地より營養分を吸收せす、唯だ其の細胞躰を包める薄き膜を通して水及び瓦斯を吸ふのみなれば、熱帶に生長する如く寒帶にも生長し、世界の上到る處、如何なる氣候も、如何なる土宜も擇ふ所ろなきなり、彼等は只た濕氣と日光とを要するのみ。彼等は如何なる土地にあるも、唯だ濕氣と日光とのみを與へらるれば、空氣中に遊離する炭酸瓦斯を吸收し、日光によりて之を分析し炭素となし、水と共に吸收せる他の瓦斯と抱合せしめ最も容易に其の營養物を作る。かくて彼等は生長し、膨脹し、分身し、雙細胞植物となりまた分身し蕃殖す。其の蕃殖の速やかなる、時として二三時間を待たすして池一面を被ひ、今までは淺かりし水をして忽に深緑色の凄味を帶ばしむることとなしとせず。

緑色單細胞植物の外、灰色單細胞植物あり、彼等の生長は少しく前のものと異なり、其の初めは種々の形をなして空中に遊離し、食ふべきものあれば直ちに其の物に宿り、四方八面に根を下し、其の一部は細微なる管となつて上方に向ひ、充分の發育をなしたるとき、管の上端にある小毬破裂し、新らしき芽となり同一の道行を繰り返して蕃殖す。彼等は自ら原料を分解

して營養物となす綠色のものに異なり、他のもの丶中にある營養物を直ちに取つて自個の營養物となす。黴と稱するもの是なり。

植物學者は多くの人と多くの時とによりて發見せり、普通に苔と稱せらるゝもの丶一種なるかび草は實に綠色單細胞植物と灰色單細胞植物との協同の結果なりと。已に述へたる如くかび草には綠色なる部分と灰色なる部分とあり、而して此の灰色なる部分は黴、綠色なる部分は綠色單細胞植物にして、灰綠の中間色を呈するは此の二つの相混し相合したるにてあるなり。

而して彼等か相依り相助けて生長する有樣を見れば更に面白きものあり。左に三種の異なれるかび草を截斷し幾百千倍して其の結構を示したる圖あり。第一は毛狀のかび草、第二は葉狀のかび草なり。前なるものは圖に示す如く細き筋を繞りて綠色細胞の列をなすあり、灰色細胞更に其の上を包む、後なるものにあつては、其の一面は空に向ひ一面は木に若けるものなるか故、綠色細胞は上方に近き處にのみありて、灰色なるもの丶一層其の上を被ひて之を保護す。



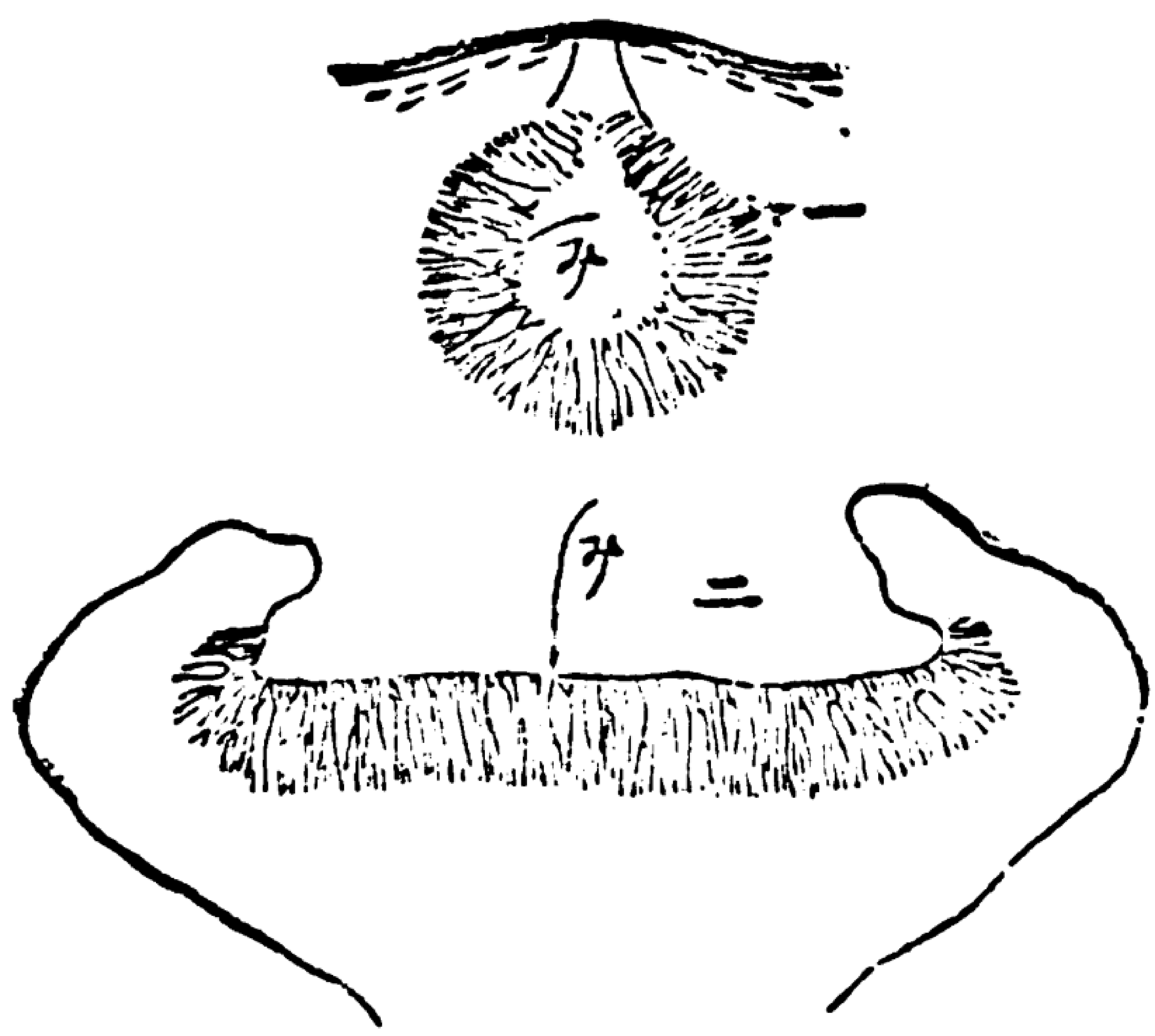
かび草截斷
か　かび
み　綠細胞

かび草の生長する有樣は此の如し。綠色單細胞の一、濕氣ある場所を求めて來り、日光の力によりて其の食物を作り生長し、蕃殖し始めたり。黴の種此處に來り(第三を見よ)木皮或は壁の上に其の細管を下し始め、

次て緑色のものを繞つて蕃殖し、しかも後のものをして常に自由に日光、空氣、濕氣を吸收するを得る地位を有たしむ。此の時よりして二種の植物は相頼り相輔くる朋友として生活し、黴は緑細胞を保護して霜雪の害、乾燥の憂なく、常に最良の地位を占むるを得せしめ、かくて防禦の武器となり、緑細胞は自ら食物を作る能はざる他に食物を與へて營養機關の作用をなす。

廣き地球の上熱帶地方を除きて此のかび草の榮えざる地方はあらず。四時雪の絶ゆることなき北歐スカンヂナビヤの高山にも、北部亞米利加の砂原にも、『人めも草も枯ぬと』思はるゝ北部亞細亞柴比利亞の寒風吹きしきる荒野にも、此の草のみは、最もよく生育し、發達し、蕃殖しつゝあるなり。

前にも述べたる如くかび草の一部たる緑色細胞は水溜にある緑垢の如く分身法によりて生殖す。他の一部たる黴の蕃殖には種々の方法あり。彼等の或ものは小さき袋の形をなし充分に生長すれば自ら破裂し、緑色の細粉をふり落し、濕氣の來るに遇へば此の細粉個々の植物となつて蕃殖す。更に複雑なる段階を經るものは、楕圓形細胞の實を聚めたる小さき盃の如きものを出し、成熟の期至れば濕氣或は雨氣を受けて膨脹し、左に掲げたる（第二）の如く破開し、各個の實より實を



かびの草の或部

一、盃形　二、開きたる　三、實

生じ、歪となり膨脹し破開しまた實より實を生ず。彼等の中にはまた歪の開かずして頂にある少なき孔より實を出すあり。

これ奇怪なるかび草の奇怪なる歴史なり、緑色細胞と傚と相類り、恐ろしき夏の旱魃よりも、最も酷しき霜雪を喜び、より大により強き同類の總てが最もよく繁茂する夏のとき、彼等が最もよく生殖する温煖の地にあつては彼等に地を讓り敢て分を犯さず、而も地上に生命の絶ゆるときなからしめん爲めに生命の有ち難きときに生命を有ち、地上に生命の絶ゆる場所なからしめん爲めに、生命のなき地に生命を有つ。彼等の生涯に就ては更に學ぶべき所ろ甚た多く、學んで快味あるもの甚だ多し、諸君若し一たび森の中に踏み入らば、彼等の種類の如何に多き歟、此の如き劣等の植物か如何に奇怪なる如何に不思議なる如何に宏壯なる観を作り出す歟を見て、見る毎に喫驚せらるゝことあるべし。而して苔の生涯に至つては更に面白く不思議なるものあり。

文藝

寓意詩

ツミーツリエフ氏作

嵯峨の家主人譯

ツミーツリエフは、十八世紀の下半期より十九世紀の上半期に於て、露西亞の文壇に其名を謳かしたるの詩人なり。彼は好んで萬有の美を歌ひ、自然に近き單純の生活を歌ひたるが、其詩は流調輕妙を以て優りたりき。彼の詩作中寓意詩も少からざるが、其はクルイロウフの如く、國民特性の原素を含めるものにては有らざりき、クルイロウフの如く、平民的の俗語を以て書かれしにてはあらざりき。されど其

辭の俗躰なると、其文の平易なるとに依りて、今に至る迄露西亞國民の愛讀する所となる。今試みに譯して玆に掲ぐ。

鷄と猫と而して鼠

嗚呼小兒よ、小兒よ！如何に貴君方の年頃は危き事で有らう歟！まだ世間を見た事のなき小鼠が、危ふく災難に遇ふ所でした。御聽なさい、今彼が其事を一族に語る所を。

私は窃我々の穴を拔出て、彼方の山を越へ、四方を見廻はして、もう予だとて若鼠、何時迄小兒で居るもの歟、さう〳〵家に斗は居られない、見るが宜、今小兒でない所を見せてくれるから、と不了見にも、國境を越へて驅出しました。かけ出してまだ五六步、忽ち二ッの獸に出遇ひました。何といふ獸歟、其は知りません、然し一ッは如何にも柔和な、如何にも善良さうな者で、最も靜に步て來たが、其貌は如何にも愛らしい風でした。今一ッは何となく憎躰な風で、變に小やかましく叫ぶ質でした。全身羽が生て居て、尻尾は釣針の樣に曲て居て、其上額の上に赤い、火の樣な赤い瘤が有て、おまけに二ッの手は、とんと飛ぶ樣に出來て居ると見え、始終おかしくふり廻はして居ました。而しておかしく喉を張て、見廻はす風の恐ろしかつたこと！私は何も憶病ではないが、之を見ると眞暗三寶、足に任せて逃出しました。嗚呼實に殘念です、若し彼奴さへ居なかつたならば、私は今一個の方と朋友になる所でしたに。其又今一個のと言つたら、如何樣に靜に其むく毛の樣な尻尾を振て居ましたらう！又如何樣に親切の風が、其目の中に現はれて居ましたらう！尤も火の樣に光つては居たが、如何樣に溫順な柔和さうな目元で、熱心に私の方を見詰て居ましたらう！其に毛と言へば私のゝ樣に柔かで、尤も頭の所は班で、肩に添ふて筋は有つたが、然し耳は我々の耳と同じ樣で、

實に好た風で有ました。私は其風に依りて判ずるに、彼は多分我々上等社會、貴族たる鼠に向て、同感を持で有らうと思ふのです。

と斯う小鼠が言ひました。其時母鼠が小鼠を諭して云ふには、

これ我子よ、お前は其樣に他の外貌に依りて賞めちぎるが、其柔和さうなのが猫と言て、我々の敵だよ。其親切さうな風の下に恐ろしい毒をかくして居のです。又今一ツのは鷄と言つて、其こそ眞個に温和い者で、何の害をもなしはしない。又恐つた事などは、唯の一度でも有はしない。のみならず、時々我々の食物にさへなります。是からもある事、決して〳〵外貌を以て他を取るのでは有ませんよ。

此寓意詩、實に巧ならすや、彼當世の輕薄才子、都人の如きは、其衣服は如何に美なりとも、其風俗は如何に風流なりとも、其言語は如何に圓滑なりとも、其擧動は如何に禮節ありとも、其言ふ所は如何に親切なりとも、之を信ずるは最も危からずや、其に反して彼田舍の農夫の如きは、其衣服は如何に襤褸なりとも、其言語は如何に田舍調なりとも、其擧動は如何にむくつけなりとも、其心には實意の宿るに非ずや。此寓意詩、最も巧に此種の意味を諷す。最も面白しといふべし。

蠅

牛が一日の勞働を終り、鋤車を牽てぶら〳〵と歸てゆくと蠅が其角にとまつて一所にゆきます。折しも向ふから朋友の蠅が飛んで來ました。來た蠅が問ふて言ふには、おい兄弟よ、何處に往て居た、？　此方の蠅之を聞て、小さな鼻を高くしていふには、なに？　何處へ？　予は田を耕して居たのだ！



此寓意又妙ならずや、牛は實直なる勤勉家を意味し、蠅は游惰なる其仲間を意味す。勤勉家は默々として業を取り游惰者は多辯にして業を怠る。然して他人の之を問へる時は、游惰者先づ答て曰く、我是々の事を爲せり、と然して彼勤勉家に至りては默して答へざるなり、嗚呼誰歟其功を知らん、世に他人の功を奪ふ者、又彼蠅の如きのみ。

蛇と而して蛭、

ある時蛇が蛭に向ていふには、嗚呼予は何たる不幸な者で有らう！其に反して汝の運命は羨しい！汝は人の爲めに喜ばれるに、予は人の爲めに憎まれる、汝には人が好んで血を啜はせるに、予を見ると逃て仕舞ふ、若し力足れば打つ、嗚呼何たる因果の事であらう？汝も彼等を咄み、予も彼等を噬む、其爲す所一にして、其愛憎の疋なるとは。と言ひました。其時蛭が答へていふには、忽論、其爲す所は同一である、然し其目的を異にして居る。予が彼等を刺すのは、彼等の利益の爲めにするのだ。汝が彼等を刺すのは、彼等の害の爲めにするのだ、予は此爲めに多くの病人をして健全の者とならしめた、然し汝は其爲めに健全の人をして倒れしめた。また人間に聞て見るが宜い、予のいふ事が迂詐歟眞歟？予は彼等の爲めに藥、汝は彼等の爲めに毒だ。

此寓意詩に記す如き事、世又其例に乏からざるべし、譬ば、牛乳と酒との如し、同じく是流動躰なり、同じく是飲物なり、されど一ツは不健全の人をして健全ならしめ、他は健全の人をして不健全ならしむ、其用同じくして其効を異にす、謹まざるべけんや。

ゲーテの書簡

逸名

ゲーテ文學はその著作よりも、寧ろその書翰、日録、

談話の顯に案むる方、却つて彼の人物を知るに近しと聞きぬ。われ玆に彼がウエッツラーに在りて交たる、エルサレムの自殺して果てたるを聞き、書をケストチルに與へて、之を悲める一節を抄錄せんと欲す。

薄運なるエルサレムよ。凶報は余をして戰かしむ、これ余の望まざる所なりき。この凶報を以て戀愛の最も樂しき階に屬するものとして聞くは、恐ろしきことどもなり。……哀れむべき少年よ。余が散策を畢へて歸れる時に、彼は月夜余に遇へり、その時余は獨語しぬ、彼は人を戀へるなりと。ロッテ（ケストチルの許嫁にしてゲーテの曾つて切戀したるシヤーロッテなり）はなほ之を記するならん、余の之に關して笑ひしことを。神はしろしめす、寂寞は彼の心を殺へせり、而して彼の形骸は七年の間余に親しくありしことを。余は彼と語ること少なかりき。余の去るや（ウエッツラーを）余は彼の書籍を携へて來りぬ。余は終生これを以て彼の紀念として保有すべし。

ゲーテの『ウエルテル』を草するや、この同情を惹きし哀れむべき一少年は、實にその材料となれり。されど彼が先づ斯の如き温き心情を傾け來りて、その悲しむべき朋友を見たる當時に細想し到れ。彼はこの後三四箇月を經て、ケストチルのロッテと婚するを聞けり。乃ち書をケストチルに與へて曰く、

彼の女の肖像は、彼の女の結婚の當日より、余の寢室より取り去りて、彼の女の母となるを聞くまでは之を回收せざるべし。

これ心中無限の悲痛を寄するもの、筆路轉た零涙の爲に濕ふの概あり。愈ゝその婚儀整ふを聞きては、神足下（ケストチル）を祝す。足下は余をして喫驚せしめたり。余は除醉節日に聖壁を築き、ロッテの肖像を埋らんとしたり。されどそはなほ余の寢室に懸

りて在り、而して余の死するに至るまで其處に在るべし。請ふ祝福を受けよ。余の爲に足下の天人とランシエシ（ロッテの妹）とに安を問へ。彼の女は第二のロッテたるべし、而してそはまた彼の女にふさはしきことたるべし。余は水なき沙漠をさすらへり、余の髪は余の蔭、余の血は余の泉なり。

以て彼の寂寥たる心情は、既に一個他のロッテを得て、少しく慰まんとするものあるに至れるを見るに足る。而して彼の爲せる一言一句は、悉くこれ人生の極處を閲歴して來れる、經驗の重荷にあらずや、われ彼の人と爲りを好まずと雖、これが爲に彼の書を見る毎に、必ず先づ泣かずんばあらず。嗚呼天才の秘密は如何なる事にありても、如何なる時にありても、また如何なる處にありても、必ず實事を語り、實事を書くに在つて存するなり、豈他あらんや。

童話

ツエコフスキー氏作
嵯峨の家主人譯

ある所に貧しい農夫が有ました、彼が病の褥に就て今や生命も終らうとした時、三人の子供を枕邊に呼て、扨申すには「予も今度は迚も助かるまいで、予が死んだなら、あの水車は太郎と二郎の兄弟にやるから、二人共よく稼ぐが宜い、又三郎にも何歟やりたいが、見る通り何も財産がないでやれない、唯此猫をやるから其を予の遺物と思ッてくれ」と遺言して死んで仕舞ひました。兄の二人は水車を貰ッたから、其で幾個歟に有つきました。然し弟の三郎は、猫を貰ッたのだから、何の役にもたちません。「馬鹿々々しい、猫を貰ッたッて何になるもの歟、せめて打殺して肉でも燒て食てやらう」。と獨語を言ッて溢して居ました。すると猫は聞いて其傍に寄り、「もし三郎樣、其樣に御歎なさるな、

貴君が私をお貰ひなさッたのは、郎君に運が向て來たのです、私が是から大功を立て、郎君を立派な人にしてあげます」、と言ひました。三郎は驚きました、猫が口をきいたのは始めてだから、此猫は餘程神通力があると思ッて、俄に貌色をなほし、急ににこ〳〵として「左様歟、其では何分頼むぜ」。「宜でざんすとも、まあ細工はりウ〳〵仕上を御覧じろ、直です、一年經ぬ中です」、と言ひ



捨て家を出て仕舞ひました。

何處へ徃たのでせう？林へ徃ッたのです。猫は林へ徃くと、向ふから鹿が飛んで來ました。鹿は皆様の知て居る如く、性來おとなしい獸です。猫は之を見ると、好獲物と飛かゝり、忽ち打殺して肩にしッかけ、王宮をさしてビシ〳〵やッて徃きました。王宮ては驚きました、小さな可愛らしい猫が、大きな鹿をかついで、とんと宮中の案内を知て居る歟の如く、どし〳〵奥へ這入て徃きますから。猫はやがて王様の前へ來り、寳座の前へ蹲踞りて、「陛下よ、今日私の主人、侯爵瑟山林に狩を試みました所此の如き大きな鹿を獲ましたに因り、謹んで陛下に獻上いたしまする」、陛下きこしめして、好獲物哉、滿足に思ぞ、との御言葉でした。猫は王宮を出て三郎の元へ立歸り、有りし委細を物語りました。扨五六日を過た後、猫は再び家を飛出しました。何處へ徃ッたのでせう？又林へ徃たのです。其處で彼は、再び大きな獲物を得まして、又王宮へ赴、其を主人侯爵の名で獻納しました。王様も侯爵瑟山は、如何なる人物歟見た事はないが、使に人間をよこさず、いつも猫をよこす、面白い男哉。殊に此猫、勿々才格有て、氣のきいた人間は遠く及ばざる程だ、面白い猫哉と思召しました。猫は立歸りて有りし委細を三郎に

語りました。其後は暫く事もなかッたが、ある日猫は再び家を飛出して、何れへ歟出てゆきました。恰度其日は熱い日でしたから、定めし涼みにでも往たのだらう、其とも又林へ狩にでも往ッた歟、と三郎は思ひながら家に居ました。するとやがて走て家へ歸ッて來たが、「もし三郎樣、さあさあ郎君の御出世の日が參りました、私と一所に往て、何でもかまはぬから、前の河で泳でお居でなさい」。「だか私は泳は出來ない」。「出來ない？其は困まッた、何故習て置なかッたのです」。「其は習て置けば宜ッたけれども、如何も仕方がない、だか何が始まるのだ？」「何でも宜ござる、私に任せてお置なされば、悪い樣には致しませぬ。然し此際に及んで泳が出來ないとて廢にはならずと、ハテ宜ござんす、何で



もかまはぬから河の中へ這入て、ぼちや／＼やッて居らッしやい、私が宜樣にしてあげます、今日は郎君は王樣に御目見えなさるのです」。猫は獨承知して、三郎を伴て河の邊へ往ました。三郎は衣服を脫で河の中へ這入り、ぼちや／＼やッて居る、と向ふの方から、下に居らう／＼と王樣がやッてお出になりました。猫は之を見ると「さあ大變だ／＼、盜賊々々、今年の盜賊は油斷がならぬ、主人の衣服を盜すんで往ッた、皆來てくれ、皆來てくれ、近所の衆やあい！」と大聲を擧て、其處等中をかけまはッて居た。王樣は前面が騷がしいから、馬上に延上て御覽になる、と折々王宮に見えた猫が、あちらへかけ、こちらへかけ、狼狽まはッて居るから、近侍の衆を召して、こら／＼折々宮中へ參る猫が、彼處で大變騷で居る、何の事だか聞て參れ、と御言葉未だ終らぬ中に、猫は今始めて王樣を見付た樣な風で、疾風の如く飛んで來り、「もし王樣、何

卒私をお助け下さりませ、私主人侯爵の君、今日此通り懸うござりまするので、河へ這入て泳で居ます中、盜賊が參ッて、脫ぎ置きました衣服をひッさらひ、一目散に逃てしまひました。私は番をして居ましたが、猫の事で、人間には如何もかなひませぬので、何卒お助け下さいまし。侯爵も衣服を取られたので、河から



擧る事出來ず、彼通り水の中でぼちや〳〵やッて居ります。何卒お助け下さいまし」と歎願に及びました。王樣は之を聞いて、やれ〳〵氣の毒な、これ家來共、余が衣替を侯爵に取らせい、といふ有難い御言葉に猫は再拜して之を戴き、走り來て三郎に着せ。又王樣の元へ走り往て、「恩賜の御衣、侯爵有難く拜領仕る、尙此上の御惠には、侯爵に拜謁仰せ附らるれば、如何斗有難く存じ奉ります」と恭しく述ぶれば、王樣も御機嫌麗しく、余も遇ひ度ふ思ふとの御言葉です。猫は大に喜びて三郎を伴來れば、三郎は恩賜の御衣を着て、ずッと侯爵になりすました了見で、侯爵の品格を保ちつゝ王に拜謁しました。其時猫は又進み出て王樣に向ひ、「主人侯爵の住居は、此より程遠からぬ所に有ます、折から日蔭も熱き夏の炎天、龍駕を其處に抂られて、御小休在らせらるれば、誠に有難がり奉ります」と何處で覺えた言葉だ歟、慇懃に申上ました。王樣御機嫌斜ならず、「左樣致すであらう、とら家來共、侯爵は徒歩の樣だ、余が乘替を取らせい」といふ御言葉に、侍臣鞍置き馬を曳て侯爵に取らせました。三郎の侯爵は、すまして馬に乘移り、轡を並べて王と共に、靜に馬を歩ます。猫は先へ立て案內して居たが、やがて道の二三十町も來た歟と思ふ頃、右手なる岡の森影に、一ッの孤城を見出しました。猫は先共の者に向ひて、彼が侯爵の住

居でござる、皆樣は後よりゆる〳〵御出なされ、私は先へかけ拔けて、城中の者共に君の御成を告げ、不都合の無き樣申し付置ますから、と言捨て城中に飛入りました。此城は魔法使の住んで居る城です。猫は城內へ入ッて魔法使の前へやッて參りました。折しも晝の時とて、魔法使の食堂には大勢の料理方集まッて騷ぎの所です。猫は魔法使の前へ立て、大法師よ、御身は魔法の名人にて、姿を或は獅子、或は虎、或は熊、或は鷲、或は狐、或は狸、千變萬化自由自在だといふが、予は恐らく迂詐だと思ふのだ、迂詐であらう？如何だ？と言ひました。すると魔法使は大聲でから〳〵と笑ひ、「馬鹿野郎、手前は予の魔法を疑ふの歟？」「左樣さ口で言ふ丈では分らない、實地を見なければ」。「其なら實地を見せてやらう歟？」「見せてくれ、如何歟鼠になッて見せてくれ。」「よし容易い事だ。」魔法使は身を一轉すると、忽ち小さな鼠になッて、ちよろ〳〵と猫の足下へ匍匐て來ました。其時猫は足を擧て之を抑へ、頭からがむと一口に食て仕舞ひました。其から魔法使の家來共に向ッて、これ手前達予の命に反むくと、此魔法使が手本だぞ。一同へーイと降參しました。猫は急いで城を飛出し、來て見ると、恰もよし、王は三郎の侯爵と轡を並べて、今入城といふ所です。猫は正面の城門八門字に開かせて、王樣の御入！警蹕の聲と共に王樣奥殿へ御入御になりました。正面の高坐に御着坐あれば、猫は魔法使が用意した晝飯の馳走を、そッくり其前に陳列して饗應山海の珍味を盡ました。王も御機嫌斜ならず、夕暮迄此處に御小休ありて還御になりました。是よりして三郎は一城の主、侯爵歷山と名のりて宮庭へ伺候し、終には此王樣の御氣に叶ひて其王女を賜はり、位大侯爵を賜はりて、家の益富み榮ゆる事となりました。猫も其功に依りて王の侍臣となり、今では高帽にフロクコート、胸には金の勳章を

附け、足には玉の沓を穿きて、出使も馬車でエーイエーイ。是でおしまい。

佐野の渡

（鉢の木）

信濃なる淺間岳にたつ煙〱、遠近人の袖寒く吹くや嵐の六井山、捨つる身になき友の里、今ぞ憂世を離れ坂、墨の衣の碓氷川、くだす筏の板鼻や、佐野の渡に着きにけり〱、

僧 急き候ふ程に、これははや上野の國佐野渡につきて候ふ、あまりの大雪にて候ほどに此處に宿を借り泊らはやと思ひ候ふ、いかに此家の內へ案內申し候ふ、

婦 誰にて渡り候ふぞ、

僧 これは修行者にて候ふ、一夜の宿を御貸し候へ、

婦 易き御事に候へども、主の御留守にて候ふ程に御宿は叶ひ申すまじ、

僧 さらば御歸りまで、これに待ち申さうずるにて候ふ、

婦 それはとも角もにて候ふ、

士 あゝ降りたる雪かな、いかに世にある人の面白う候ふらん、それ雪は鵞毛に似て飛んで散亂し、人は鶴氅をきて立つて徘徊すといへり、されば今降る雪も、もとみし雪に變らねども、我は鵲氅をきて立つて徘徊すべき袂も朽ちて、袖せばき細布衣陸奥のけふの寒さをいかにせん、あら面白からずの雪の日やな、や此大雪に何とて是にはたゝずみて御いり候ふぞ、

婦 さん候ふ、修行者の御入り候ふが、一夜の宿と仰せ候ふ程に、御留守の由申し候へば御歸りまで御待ちあらうずる由仰せ候ふ程に、是まで參りて候ふ、

士 さて其修行者はいづくに渡り候ふぞ、

僧 我等が事にて候ふ、いまだ日は高く候へども、あまりの大雪に前後を忘じて候ふ程に、一夜の宿を御か

し候へ、

士 易きほどの御事にて候へども、あまりに見苦しく候ふ程に、御宿は叶ひ申すまじ、此山鼻を彼方へ十八町ほど御いで候へば、山本の里と申して泊りの候ふ、日の暮れぬ先に、たゞ一足も御急ぎ候へ、

僧 さては聢と御かしあるまじいにて候ふか、

士 御痛しく候へども、我等二人さへ住み兼ねたる躰にて候ふ程に、中々思ひもよらず候ふ、

僧 あら曲もなや、よしなき人を待ち申して候ふ、

婦 淺ましや、我等斯様に衰ふるも、前世の戒行拙き故なり、せめてはかやうの人に値遇申してこそ後の便りともなるべけれ、然るべく御宿を参られ候へ、

士 あら何ともなや、さやうに思しめさば、など前には承り候はぬぞ、いや此大雪に未だ遠くは御いで候ふまじ、某追つ付留め申さう、なう／＼旅人お宿参らせうなう、あまりの大雪に申すことも聞えぬげに候ふ、痛しの御有様やな、もと見し雪に道を忘れ、今降る雪に行方を失ひ、唯一所にたゝずみて、袖なる雪をうち拂ひ／＼給ふけしき、古歌の心に似たるぞや、駒とめて袖うち拂ふ影もなし、佐野の渡の雪の夕暮、かやうに詠みしは大和路や、三輪が崎なる佐野の渡、是は東路の佐野の渡の雪の暮に、迷ひつかれ給はんより、見苦しく候へど、一夜は宿り給へや、實に此も旅の宿／＼、假初ながら値遇の縁、一樹の陰のやどりも此世ならぬ契なり、それは雨の木影、これは雪の軒ふりて、うきねながらの草枕、夢より霜や結ぶらん、

家政

小事に注意すべき廉々

小事を擲ち、小事に不注意なるより、失なふ所の物品、

失なふ所の金錢、失なふ處の時間は、如何に大なるものぞ。煙草を吸ふ暇を以て、僅かに五分と假定し、一日中にその五分を浪費せりとしても、一年には千八百分、即ち東京より横濱迄三十六度行く丈けの時間となる。もし我等が死せんとするに瀕し、千八百分の時間を價にて買ふことを得ば、身代を盡しても之を得んと欲する大切の時間なるを、我等が日々に費やす處の五分を日々活用して行くときは、我等の一生には幾百千萬分の時間を經濟し得べき。金錢元より又全し。一日一錢の少金も、一年には一圓六十錢、一生の間には八百圓の大金となる。かく小さき事と雖も、捨てをけば萬事大事とはなるべし。

＊　＊　＊　＊　＊

何れの家にても、急く時に道具の見へざるがため、今日爲すべき事を、明日迄延ばし、明日迄延ばしたるが爲めに、失敗することはめづらしき事にあらず。風雨はげしき夜に戸の蝶つがひの針のをれたるが如き場合に、急に求むるに得ざるがため、止を得ずして明朝迄棄て置くと假定せんに、その夜直ちに直ほせば、僅かに針一本の事にて、小さき下女の手にても尙ほ能く止め得べきも、翌日迄殘せしがため、戸は落て粉な〳〵となるのみか、悪ろくすれば、その處より風雨の音にまぎれて、盜賊の忍び入ることあり。

＊　＊　＊　＊　＊

小供の衣物の綻びたる時、或は豆大の孔の明きたる時、主人のシヤツの破れかゝりたる時、洋服のずぼんに孔の明きたる時、もし一と針を早く用ひたらんには、尙ほ長く衣る事を得べきを小事に心を用ひざるより、シヤツも、ずぼんも、小供の衣物も一度に破れて、再たび物の用をなさゝるに至る。

＊　＊　＊　＊　＊

英語にては、經濟と云ふ語は、元とラテン語の「家」と

云ふ字も「法律」と云ふ二字より來れりと云ふが、凡て一家の主婦は、妻君學とも云ふべき家事經濟を心得て、小事に注意するを第一とす。經濟の道は、大なる收入を得んとのみ考へずして、たとへ小さきものたりとも、無益なるものは、少しも家より出さゞる事を學ぶにあり。

少しにても、無益のものを出ださゝることを學ぶと共に、大なる物と雖も、有益なる者は惜しまずして需むべきことを忘るべからず、即ち一時にて消ゆる空しき遊戯、或は注意によりて長く保ち得べき物品を、不注意によりて空しくすること等の如き、不生産的の事は嚴しく之を費やすことをさけ、その變りに慈善事業、矯風事業等の如き事、或は家事を治むるに必要なる器具、もしくは身躰の健康を保つがための滋養物等は、惜しまずして之を需むべし。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

誰の家にても最も無益に費やし易すきは、乘車なり。我等の祖父母の時代には、二里三里の路すらも、草履を穿ちて歩行せしを、便利なる器械の出來るに隨ひ、人は益々惰弱となり、丁稚小僧が使ひに行くにも、鐵道馬車に打ち乘り、學生が花見に行くにも、高き金錢を拂ひて乘車するに至れり。必要の時は元より乘車するもよけん。されど遊戯のために、或は保養のために鬱散見物に行くに、乘車するは我より好んで、無益に金錢を捨て、その上に折角の目的とする健康のためにはならず、損の上の釣錢を取らるゝに等しければ、經濟に心ある人は最も乘車を節すべきなり。

＊　＊　＊　＊　＊

小事に注意することは、只だに經濟の上のみならず、子供の教育にも、己れの修身上にも、學問をするにも、人と交際するにも、下女下男を使ふにも、一事萬事に必用なる事なり。例へば小さき事ながら文字の書き樣、

言語の使ひ用によりて大に人の品格を上げもし、下げもするとあれば、字を書くにも、語を發するにも、己が品格を下さぬ樣に心かくべし。殊とに文字の書き振、言語の使ひ樣等は、子供の時分に習ひたるとが、一生の癖となりて、中々改め難きものなれば、童兒を敎育する人々は、殊に小事に注意すべし。

＊　＊　＊　＊　＊

或る貴顯の奥方に、上品にして行儀も能く、誰人の批難を受けしとなく、當時賢婦人の稱を受けし貴夫人なりき。その御夫人の御里方は、知らざれども、その御夫人の言語動作より見るに、必ず貴族の令孃たるに相違なしと、人々評し、召し使ひの者も歸服したりき。その夫人或る時非常の大熱を煩ひ、惱言を言ひ接け給ひければ、お付きの者共も心配して、皆々御枕邊に侍りけり。かくて五六人枕邊に侍る時、夫人は上は言の内に大音して實に下賤なる言を云ひ給ひければ、お侍の人供互ひに目を合せ、只だあきれて居たりしが、後より聞けば、その夫人は幼稚の時不幸にして一度下女奉公をなすべく、或る家に送られけるか生來の卑しからざるを聞き、その不幸を憐みて、早くより救ひ上げ、今日迄貴顯の家に住みたれば、その敎育により舊き習慣は改まりて、夫人として少しも恥ぢざるのみならず、反て氣のきゝたる賢夫人なりしかど、幼少の時の習惡何處にか殘りしと見へ、かくは不覺の内に發したるなりと。是によりても知るべきは、小事の注意なり。小兒の内に聞きたる事、見たる事、習ひたる事は、染み込みて中々に去り難ければ、小兒を敎育する人々は、言語動作の小事に至る迄、深く注意すべきなり。

贈物のペン拭

或る人の机の上に、人形立てり。何心なく手に取りて

見しに、衣物の中がはにはインキの跡點々たり。その形殆とペンをふきたるもの丶如くなりければ一見してその亂暴なるに驚かんとせり。時に持主語りけるに、その人形を何なりと思ふや、そは昨年のクリスマスに余が友人より贈り來りしペン拭にして、今や友人は萬里の他國にあれども、その人形を見る毎に、その人を思ひ出づるなりと。

余は實にもと思へり、たとへ價は高からざるにもせよ、格好に職人の作りしものに比して拙なるにせよ、自分の作りて贈りし物品は何時迄もその人を紀念せしむ。今や年暮にせまりたれば、正月歳暮の贈答をなすにも、亦た此の主義を忘るべからず。此のペン拭の作方は圖に示めすが如く、燒き物又は切の人形の頸に頭巾を蒙むらしめ、襟飾を着けて、その衣物は四角なる切れを五六枚重ね、その中央に頸の入るに適したる丈けの穴をあけ、そこより頸を通し前のぼたんに當る邊へ針を通し中の頸飾りの切と後の背に當る所の切迄針を通して、强き糸にて縫ひ止むべし、その衣物こそはペン拭に用ゆるものなり。



之れは殺風景なる一片の切のペン拭を机の上に置たるよりも、躰裁よくして、一つには机上の裝飾となるべし。

小兒の間食

やぎ生

小兒の間食ほと恐るへきはなし、若し其度を過こしなは脾疳の病を釀し、これか為に命を失ふに至る、よし回復することあるも、脊虫といふ不具者となりて一生不自由に暮さねはならす、謹むへきは小兒の間食にてそ。

されは小兒に間食を與ふるには嚴格に時刻を定め、そして成る丈け消化し易き物を選ふへし。乳呑兒には輕燒、鹽煎餅、パンの類尤適當ならむ、四五歳以上の兒には余か言を俟たすして澤山ある也、然れとも砂糖を多量に含みたる菓子は口當りのよき故小兒の好むところなれとも、齒、胃を害するものなれは與へさるかよろし。

市街又は田舍の町には一文菓子屋とて、不熟の果物、黑砂糖製の駄菓子を鬻く店あり、此店前には十三四の子供を首とし四五歳の者及ひ子護女日々群を爲し、父母に乞ひ得たる錢を以て、各好める菓物を求めて貪り食ひ、滿腹せされは倦かす。是等の習慣は都鄙皆同一にして、最惡しきことゝもなり。今日は警察も行屆きて、不熟の果物は直くに差止めらるゝと雖とも、そは最醜惡なるものに限れるを以て、父母としての眼より見るときは、食せしむへからさるもの尙夥多あり、且小兒か此風習に感染するときは、長して金錢を浪費し、終には親の意見も用ゐさるに到る、されと父母たるもの小兒をして自ら食物を求めしめされは、是等の注意も要らさる也。

手土産に菓子折を携へて直接小兒に與ふる人あり、これもよろしからす、其故は注意の深き親は小兒に間食を與ふる刻限及制限あるへし、然るに時ならす客人より小兒に手渡するときは、小兒は自己のものと心得如何に云ひ聞かするも離さす、悉く與へては食傷すへし、さりとて歡ひ居る所を無理に奪ふて泣出すことありては、客の手前氣の毒になり親もほと〳〵困りて、好意の贈物もかへつて仇となるへけれは、小兒に與ふる物は必す父母に渡さるへき也。

宴席なとに招かれて到りしとき、運ひ來る主人の兒に膳の肴を與ふる者、余か往々見受る所なり、是亦よろしからす、理由も粗ほ前と同樣なり。日本料理なれは

口取物、口取物の中にては先つ蒲鉾なるへし、歯の十分生へ揃はさる小兒に蒲鉾なとを與ふるは最も危險なり、兎角鵜呑にして咽へ支へ窒息することあり。筆の序に咽支への治療法を御話し申すべし、余は醫者專門にはあらされとも、或人の話に小兒か食物を咽へ支へたるときは、口を開かしめて箸を入れた所が、或は背を撫した所か、中々支へか下るものにあらす。紙にてコヨリを製し鼻の穴を探るへし、さするときは嚔とゝもに支へたる物出つるなり、然れともこれはあまり手荒き療治なれは、人馬平安散といふ風邪藥を極々少量鼻の中に吹き入るへし、これは害なくして嚔出ること奇妙なり、賣捌所は東京四ッ谷灰吹屋と記臆す、然しこれ等のことに依賴して醫師を招くを怠り玉ふな。



寒中の野菜

寒中の料理すべき蔬菜なしと云ふは、必竟寒前よりの用意足らざればなり。もし嚴寒八百屋の來らざる時、食卓にめづらしき蔬菜を上せんとせば、秋の末か、冬の始めに得らるべき植物を、上手に貯ふるとを忘るべからず。

貯へに最も適したるは、蕪、大根、ジヤガ芋、チヤベツ、赤大根、コーラビと云ふ西洋の野菜等なり。是等を貯ふには大なる箱の中へ能く燥わきて土の加はらざる砂を入れ、その中へ野菜を入れをけば、入用の時出して用ゆるに、何の手數も入らざるかこい法なり。濕氣は植物をして根を出ださしめ、溫氣は植物の芽を出たさしむるが爲に、その箱は物置の隅の如き棚の如き燥きて寒き所へ、氷らざる迄に藁などを掛をく時は、春に至る迄實事に貯へらるへし。蕪大根等は芽の出で

易きものなれば、菜の眞中の心の所を摘み取りて、發芽力を失なわしめ、ジヤガ芋等は土の上に置き、蕪、大根、赤蕪等は、その半を埋め慈姑、蓮の如きは、全く埋めて貯ふべし。而して用ゆる時は、一時間計り前より水に浸しておき、煮る時も烈火を用ひずして、長くそろ／＼と煮る時は、味ひ殊に美わしと云ふ。

保溫器

來客に當りて、寒中殊に最も困るは、調理せしもの丶冷ゆる事なり。或は之を布にてつゝみ、或は巨燵の邊に入れ、或は鐵瓶の口に置など、種々の工夫を要するとあり。小人數の時はそれにても可なれども、多人數に至りては、格別窮するとあり。かゝる時の用意に最も大なる金盥と、少し小さき金盥を求めおき、大なる盥の中に煮へ湯を入れて、微火の火鉢の上に上せ、その中に小さき金盥を浮かめ、その小さき盥の中に溫めんと欲するものを皿等に入れて上せ、上より鍋等の蓋を以て覆ひをかば、冷むるとなく、火上にて直接に溫めしもの丶如く、水分を去りて味を損するの憂もなくして、最も名法なり。

寒中の蠣

學者の說に因るに、蠣は牛乳と仝量の滋養分を有し、人躰の組織を助け、網膜の力を回復し、殊に氣力を增し、躰熱を加ふるが故に、冬の食物として最もよしと云ふ。

竈の油虫と松脂

油虫は冬日殊に竈の溫たかき所へ群集して、臺所の淸

潔を害し、追へば一時は逃ぐると雖も直ちに又元の如くに集り、殆ど退治に窮するとあり。松脂は油虫の最も厭ふ物品にして、虫の集まる邊にその一片を投ずる時は、虫は悉く逃げ去ると云ふ。仝虫のために悩む人は試み給へ。

手輕西洋料理

パンのフライ

食卓に並べたる食物の内にて、色は卵雞の黄味の如く、形は菓子の松風の如く、一見して食慾を增すものは、パンのフライに若くものはなし。平常パンを食する家にて、外部の堅き處をむなしく犬猫の食となし、或は砕きて雞等に與ふる家あり。こは寳を持ちながら、之を捨つるに等しく、誠におしき事なり。かゝる家にては、重ねて二つの箱を備へ置きて、外部の堅き處は一方の箱に入れ、その細末は他の箱に入れ、何れも能く乾燥して保存する時は、大に料理の助けとなるべし。その細末は已に人々の知る如く魚獣の肉のフライを爲す時に衣に用ゆるか、又炮烙にて焦りて狐色となし、肉の焼きたる上なぞにふりかけて、飾となすによし。外部の堅き處は、一寸炮烙にてあぶり、能く燥きたる時、之を雞卵の黄味の中に轉ばし、上より少量の燒塩を振りかけ、サジ一ぱい計りのバタ、若しくは牛の脂を解かしたる焼き鍋に入れ、絶へずかき廻し、滿面金色の焦色を帯びたる時、火より取りをろし、上より先きのパンの細末を焦りて振りかくべし。これは油にていためたるジヤが芋、或は湯出たるケヤベツを、花形に刻ざみて廣き皿に付け合すべし。

豕の燴汁

豕と云へば一口に不消化なりとて捨てらるれども、料理の法方よろしき時は、最も消化能くして、味ひ美と

なる。日本の料理にも、俗に出合ひものとて牛肉に葱、大根に油揚の如き一種調合の味を有するものあり。西洋料理にても又た仝し習慣ありて、乾酪に焼パン、冷肉にからし、豕に林檎の汁、と云ふは一般に行なはるゝ習慣なり。

實際豕は冷肉にて食する時は、肉類中にて最も不消化なれども、温かきものは大に消化し易し。豕の料理の中最も一般に持て囃やさるゝは、鋭るどき膠汁と俗に呼ぶ所の汁なり。その作り方は豕を小さく刻ざみて鍋に入れ、ジユン／＼と音のして肉の鳶色になる迄之を焼き、その上よりタレとて牛肉等を炙る時に用へる汁を、五勺足らず入れ（之れは牛肉屋にて買ふべし）之れに葱を少さく切りたるものと、酢を五勺計り加へ、煮上かりたれば、葱も肉もすくひて除け、一サジ計りのうどん粉をとかして之に加へ、一二分間沸騰したる後、塩、胡椒を加わへて火上より下ろし、先きの焦げたる葱、胡椒を入れたる皿の上に踐きて食膳に供す。若し酢の入るを厭ふ時は、酢のかわりに西洋からしを少し入れ、望みによりて少量のバタを入れ、葱を少さく刻ざみ、焦がしたる上より踐ぎかくべし。

豕の足の佛蘭西料理

日本にては豕の足は氣味惡しとて用ひぬ人もあれど、佛蘭西にては最も上等料理の一として用ゆ。その製り方に種々ある中に、左の如きは最も美味なり。

豕の足の肉の付きたる處を、骨と共に五六寸づゝに切り鍋に入れて湯出、煮へ通りたる時之を取り出だし、肉と骨とを離なち、その肉をふきんの如き切につゝみて、丸ろめ、水氣を去り、暫ばらく冷やしその丸ろめたる肉の冷めて、ホロ／＼と散らざる樣になりたる時、卵の中に入れ引き上げて又たぱんの細末の上に轉ろばし、クロケツトと稱する西洋料理の如く、油を引きたる鍋の上にて焼くべし。

又た一の方法は湯出たる肉を、油を引きたる鍋の上にて、薄焦けになる迄こがし、之に豌豆の汁をかけて用ゆ。豌豆の汁とは豌豆をひやかしをきて、之を能く湯出、殆ど解くる位になりたる時、絹篩にて篩るい、その汁を少しのうどん粉と、鹽と、胡椒とを以て加減し、之れに玉葱を焦したるものと、雞卵一個計を入たるなり。

肉と卵の厚燒

五勺計りの牛乳に、サジ一杯のバタと、サジ一杯のうどん粉を加へて、鍋に入れ、火上に置きて攪き廻わすと少時にして、火より下し、更らに玉葱少量と、芹三つ葉の如き靑物を小さく切りたるもの少しと、肉の刻みたるものと二個計りの卵の黄味とを鹽にて加減し、火上に置きて、暫らく煮、さて先きの煮たるものと混合せしめ、二三個の卵の白味を入れ、倘ほ薄すき時は、少量のうどん粉を入れて鍋に入れ、上下に火を置きて蒸す時は、厚つ燒を得へし。

製造家の内幕

手工案内受持の記者病氣にて此度限り欠欄との事、折角順序ある記事を差しかへて御披露申すも異なものなれど歲晩の事にもあり旁々世間一般混雜の折柄なれば多少是れに因んだ事を掲載するも強ち大方の御眼ざわりにもなるまじきかと、爰に手工案内の題外として聊か固陋の穿鑿を述ぶ、看客よろしく御勘辨を乞ふ、

生業の消長

手工者の側より言へば成宜く工銀高くして仕事の多からん事を欲し、問屋の側より言へば需用多くして物貨の高からん事を欲す、是れ双方共に十分の願なれ共今日の世間決して是を許さず、爰を以て一方は寧ろ工銀安くとも仕事の澤山ならん事を冀ひ、一方は物貨高からず共寧ろ賣行の多からん事を希ふ、是に於て双方の

寡衆稍ゝ調和し、利益を求むるの計を物貨其物に於てせずして寧ろ數量に於てするに至る所謂數より利を見る『數でなし』の世界となる。譬へば日に百個の物品を製出して一個の利を見んよりは、むしろ五百個の物品を仕込みて二個の利を見ん事に奔走す、是れ實に現今小資本家の算勘なり、故に彼等の注目する所は頭上の物より足下の物、戸内より戸外、其實用品なると修飾品なるとを問はず、其什器と翫具とを論ぜず、居家座右の用品、歩行身體の附屬品、帽、靴、傘、懷爐、鏡、蠟筆、花插頭、石鹼箱、何にても其需用の多くして數の支へざる見込あるものならば進んで製作を試む、利する處は唯數なりと言ふ。

數の觀念は世界を監くするの具なり、一個の物品に就て二厘の利益を着すれば日に五百個の物品が差支なく捌ける見込立たざれば奮つて企業する者はなし、譬へば今茲に小兒の足に向つて一種の花履を製作せんとするか。東京市中の小兒を目算してまづ十萬人、假りに此の顧客をして悉皆我が商品の需用者とするも毎日五千足の計算を以て造り出せば僅々二十日にして休業せざるべからず、猶一層規摸を宏めて田舍的仕出の製品とせんか、關八州、奥羽若くは北海道を引受けて概算東京市中の五倍とするも製作の力を擴張して三ヶ月に至れば物貨は正しく市場に溢れん、されど一般の小製造家なる者は決して斯の如き數量の懸念なぞあるものにあらず、需用者は需用者なり、供給者は供給者なり、我まづ是を製造せんと、直ちに問屋と引合をなして着手す、一人新規の事を創めば是に倣ふ者周圍に幾十百人あるか、今是を雜報的に譬へて見れば、街上の一商店に近頃珍らしき新工風の履皮若くは花履の如き物ありとせよ。製造家なる者は是を見て立寄り物品を仔細に味吟したる上にて、まづ其卸直段を問合せ、實行の數量を尋ね、扨言ふやう、實は拙者事目今該品製

作に從事致し居る者に候、品物は一層の念入品にて躰裁ズットよろしく若し貴店にて御披露目下さらば二割方の廉價を以て差上ぐべし、必竟當節柄の事故直段さい安ければ世間に購求者は澤山あるべし。などゝ言葉を濁して立歸るや否や、直ちに原料を仕込み、手工者を募り、以て僅かに先んずれば能く人を制すの範圍内に於て多少の利益をなす、其喰合は實に際どきものなり、扨そこで市塲の景況は如何、街上の商店に於て新規の商品を睨みたる者は我一人と思ひの外、同日同時に製造を創めたる者、廣き東京には五人できかず十人できかず、彼等は恰も申合せたるが如く三日經ぬ間に市中の入方より製品を持出し、而かも我より二割方三割方の廉價を以て續々注文に應ず、斯の如くして僅か半月立たぬうちに貨物は市塲に溢れ、後は例の葬式的賣買(見切物大安賣)、後れ馳せに事を創めし者は賣口なくして結局是を質店へ投じ、以て僅に原料の損失を償ふ。往來の商店に於て一個五錢八錢の價せし品が同日同夜の露店に於て一錢若くは一錢二厘の捨直を以て賣却さるゝが如きは、畢竟小製造家の算勘に前の如き事情あるが故なり、斯の如き製造家にかゝる手工者にあッては前途の見込甚た覺束なく、猪牙商人と共に物を見て徒らに走り、物亡なれば又他を逐ふ、始終是が奔命に疲るゝの有樣、到底手工を蓄積して富を作るの位地に至らず。憐れ小資本主の半面、亦此の消極的事實の在るを鑑み玉ふべし。

資本主の經濟

試みに諸君若干の資本を卸して玆に團扇の問屋を開業するとせよ、諸君が一個製造家たるの智識を以てまづ原料を買入れ職工を聘し、而して其處に工塲を設け仕器を供へて、竹を割かせ、紙を刷らせ、骨編み、糊付の順序を經て仕上に至るまでの諸入費を計算して是を左に置き、而して出來上りたる商品一切を世間並卸直

段に見積して是を右に置き、双方對比して其間に什麽の利益かある。諸君恐らくは資を投ずるに猶豫する處あるべし、然らば世間一般の問屋なるものは如何にして利潤をなすか、是邊の算勘局外者には無益の穿鑿かも知れずと雖も苟も手工者として事に立障る以上は多少の注意を持つべきものなり。申までもなく製造家の損益は一に手工者の使方如何にあるものにて、小資本主が第一の經濟は製造所を設けざるにあり、譬へ如何なる種類の手工者と雖も苟も一の工場へ招きて就業せしめんとせば少くも日に十錢以上の工銀を拂はざるべからず、然れども其人をして自宅に働かしめば五錢にても辭せざるべし、既に製作所を設けず、茲に家屋料の損耗なし、既に職工を聘せず、茲に特別の監督者を要せず、既に工場を設けず、製作の責任は悉皆手工者にあれば萬一の損物當人をして償はすが如き資本主の懐合に於て大に利する所あり、倘其紙を刷らすが如き、繪の具、糊料を使はすが如き工場の物品を使と、自家の物を使ふと孰れに多く經濟の心あるや、倘又其器具の使用法に於ても會社の常備品を使ふと自分の鋏刀、庖丁を使ふと何れに深く丁寧の心あるや。是等は豫ねて問屋が注意する所にして數十百人の手工者を使用しながら敢て一の工場を設けず敢て一の器具を備へず、唯僅かに原料買入の資を投ずるのみにて未成品より未成品を吟味して甲より乙へ渡し、乙より亦丙へ渡させ千個に就て一部分若くは一個所の手間賃幾何の割合を以て初手より仕上に至るまで悉皆是を下職人に任かす、製造家たるもの唯二間間口一軒の小家を以て猶よく數千萬個の物品を製出す、素人が企てゝ利益のなき所にも其道の人々が手を入れて算勘すれば多少の利潤を見るに至る、敢て團扇屋に限らず、敢て飾具屋に限らず、問屋の經濟すべて此の如し。

日用品物價

◎白米（一圓に付）　一等米八升九合●二等米九升一合●三等米九升四合●四等米九升九合●五等米一斗三合

◎雜穀　本貫大麥三斗一升●臨坳大麥三斗二升五合●祼麥二斗二升五合●相州小麥一斗七升四合●船橋小麥一斗八升五合●常州小麥一斗九升●下總小麥一斗八升八合●千葉小麥一斗八升五合●札入竹林麥一斗六升八合並一斗八升五合●上割麥一斗八升並二斗●肥後上小麥一斗八升三合●稗五斗二升●室閣小豆一斗二升八合●中手小豆一斗四升五合●本坳逆厚金時一斗三升●銚子隱元九升●庄内平豆一斗七升五合

◎種油　荏油十五圓六十錢●地水九圓六十錢●桐九圓二十錢●胡麻十一圓六十錢●イ十圓五十三錢●井桁二十圓五十二錢●久ト十圓五十五錢●一川十圓五十五錢●入山十圓六十三錢●チヤスタ一圓八十八錢●上饂一圓八十六錢●タンタ一圓七十四錢

◎鹽　赤穗三俵九分五厘●大鹽井八家四俵〇五厘●本齋五俵七分●新齋六俵九分

◎操綿　新三州上銘大入七百八十目●新三州文庫八百五十目●新遠州文庫八百四十五目●新唐白綿八百七十目●新唐赤一貫四百十目

繪畫

丹青叢談（承前）

蕉陰生

二十四、大西醉月は京都の人にして初め畫を望月玉蟾に學び晩に元明諸家の風を慕ひ、頗る風致ある畫を作れり。或日友人を招き集めて盛筵を張りしかば、集ひ來りし人々皆怪みて、かれは日頃貧しく暮してなか〳〵筵などを張るへきものならぬに如何にしてその費をや得たりけんと、因て其故を問ふに、答へて、まことにさることなり、常はなか〳〵君たちを饗應さんこと思ひもよらす、昨日たま〳〵ある方より潤筆として銀一枚を得たり、依りて聊か枯腸を潤さんとするなり、されと我一人にてせむも面白からねは、さては君達を呼ひ集たるなり、心おきなく遊ひたまはるへしといひ

しとそ。これを以てむかしは潤筆の廉なりしを知るに足るへし、また偶得たる銀を一夕に散し盡して晏如たる醉月の胸懷も推測らるれ。

二十五、畫中に詩あり、詩中に畫ありの語は直に以て竹田を評するに足る、竹田姓は田能村名は孝憲、字は君彜九疊仙史紅荳詞人等の數號あり、豐後國竹田の人なり故に竹田と號せり初め岡藩に仕へぬ、人となり慷慨、屢時事を痛論して疏をさゝけたれとも、報せす、遂に病に托して仕を辭し、これよりまた時事をいはす、關西諸州に漫遊して多く文墨の士と交はる、中にも山陽とは尤も親しかりき、竹田甚た花を愛して、家の後に園を開き、多くの奇葩異蕋を集めうえて自から灌漑培養して、その間におのか書齋を作り、花開いて、錦おりなすとろには、室内に香を焚き茶を烹て逍遙吟咏して自ら娯みとなしけり、その書畫の淸高なるもまた故なきにはあらし、竹田常に、客人の來りて、さて歸らんといふに臨みていへるやう、おのれ、この後そこもとに遇んときまでは必す、わが畫技をいま數歩進めおくへし、と告けしといふ、これまた竹田の如何にその畫に熱心なりしをも知るに足りぬへし。



二十六、其畫よりも寧ろ書を以て名高き貫名海屋は、名を苞といひ字は子善といひ崧翁と號しき、京都近世の鴻儒なり、山水を善くす、海屋年尚壯なりし頃北陸地方を漫遊し能州七尾邊の奇勝をさぐり日々其けしきを寫し居たり、一日吏あり、來りてその寫せるさまを見

て、急にとがめて、いふやう、汝ち何者なれは、みたりに我か國内の地圖をとれるにや、もし眞をはかぬに於ては、辛きめにあわせてくれんづと、居丈高になりて、のゝしるに、海屋大に驚き、いな決してさるものに候はず、おのれは、都の畫工なれは唯その景色を寫すはかりなり、されど、寫さんことを許し賜はぬうゑからはもはや寫すまじ、ゆめ〳〵おのれは怪しきものに候はすとひたすら、詫れとも、吏なか〳〵に疑をとかず。あやまり入る、海屋を無理にひきたてゝ、廳に送りぬ。こゝにて漸く疑ひは晴れしかど、我國内の圖を他國人に渡すへきものにあらすとて、遂に寫生帖はとりわけられ、吏を附けて、國境まて送り出



されたりとなむ、また一興ある話なから、文墨の士にとりてはこよなき迷惑の事ならんかし。

二十七、鈴木鵞湖は文晁晩年の弟子にて、大に南北一致の學を唱へてそのころ關東にはもてはやされし人なりき、鵞湖頗る南宗畫を嫌ひてこれを排斥し文人畫にむかひて毒矢を放つことおびたゝしかりき、終には鋒を關西の畫家に及ほして讒謗詆譏いたらざる所なし、時に田能村竹田の高名あるを憎みて、未た其畫を見たるとなきにしかも、必す竹田は伎量のなきものとこそ言ひはなちたり。或時人ありて竹田のものせし觀音大士の像をもち來りて之を鵞湖に示めす。乃ち披き看るに紙本に畫ける小品のものなから筆意古淡、畫格清高、よく李伯時を學ひ得たる者と謂ふへし、鵞湖眸を凝してこれをみること、やゝ暫くにして大に嘆していひけるやう、われさきに竹田の畫を見ずして早くも伎量なしといひけるは、まことに愧つへきことなりし、今こ

そその高名のある故を悟り得たり、さて／＼大家には虚名のなきものかなと、漸くに感嘆して、手つからその像を寫しとゞめ、時々門生等に出して示しけるといふ。世の畫家たるものこの段の心事なくてはかなわぬことならすや。

二十八、池原日南、名を香穉と稱し、肥前長崎の人なり、來りて東都に住居なし居たり、詩歌文書書畫にいたるまた、精しからさるはなかりき。ある人新に襖四枚を造り、日南を招きて、此に充滿すへき畫を請ひしに、日南立ところに筆をとりて、まつ中央の一枚に大なる松樹の半はを畫きて他の數枚には垂れたる枝四五本も描き終りて、これにてよしとて筆を擱きつ。人々就てみるに、その松の幹は中央に半身をのみ畫きたることなれは、その大さは幾許なるを知るへからす、而して垂れたる數枝は、唯その偃蓋の端のみを窺ふか如くにみゆるなり。實に筆すくなくしてしかも數枚の襖にみち／＼たりしかは皆驚嘆して日南の畫才に感伏せしといふ。

二十九、前賢故實をもてその雷名を轟したる容齋菊池武保はその先、肥後守菊池武時より出づ、武時十九世の孫を武長といふ、江戸にうつりすみて幕府先手與力となる。子なかりしかは其弟の子を養ふて嗣となし



ぬ、これ容齋なり容齋性至孝人倫に厚つかりき、友のその親に薄きを見ても大に怒りのゝしりて、その人と交りを絶つまてに至れり。あまりに量の狭きことならずやとある人の戒めければ、大に悟る所あり、因りて容齋をもて號となしぬ、今上其齋を嘉尚したまひて、

日本畫士の稱をさへ拜受するにいたりぬ。容齋あるとき大久保一翁に誘はれて某諸侯の宴にいたりぬ、時に席上相會するの人々は當時の名流ならざるはなかりき、偶畫士某なるものあり戯謔滑稽あるは歌ひ、あるは舞ひ頻りに座興を助けたり、容翁はそのみくるしきを惡みて。そのこゝろよからさるの色目から面にあらはれしかは座客皆氣の毒に思ひていろ〳〵慰さむるといへとも尙とけす、遂に宴の了るまて一言をもいはさりしといふまた容齋年五十に垂んとして尙其畫伎を賞するものなく、爲に貧殊に甚し、一日、人にかたりていふやう。おのれこれ迄畫伎には隨分勉めたり、而して人のわれの伎術を語るものをきかす、かつこのまゝにあらんには餓死せんやも計られねはわれ最早畫伎を絶んそ。其人氣の毒に思ひ、これを留て。御身のしか陳ふはことわりなり、しかれとも折角これまて畫道を來りしものを今急に他に轉せんはかへす〳〵も惜しきことそならすや。よりて今一度大作をなして世に問ふてみたまへ。もしこの時も尙顧みる人なけれは其上にて畫事を廢し賜ふとも決して遲きことにあらずや、と切に諫めけれは容齋もやう〳〵思ひ直し、それより日夜從事して一大畫幅を作れり、これによりて世の人々漸く容齋の價値をしり勃然として今日の盛名をなすにいたりしといふ。大器晩成の語また虛にあらさるなり。

三十、蒔繪に於ては當時その右に出るものなく、畫事に於ても意匠斬新、筆致飄逸庸手の企及ぶ能はさるものは柴田是眞なり、初め畫を鈴木南嶺の門に入りて四條派を學ひ、蒔繪は當時有名の坂內官蠻の門に入りてこれを學ひ得たり、文政七年の頃京都に至りて岡本豐彥の門に入りて能くその骨髓を得たり、是眞原來世辭追從なといへる事は大に厭ひ。如何なる人にても面前に於ては一歩も讓らす直言して憚ることとなしといへとも陰にては毫も誹謗がましき事を口にしたることなか

りし。是眞の逸事軼聞一々詳かに書き來らは日もなほ足らさるものあり、今その一二を擧けん。是眞ある豪商より吸物膳を賴まれたれは、之をうへないて、下繪を見する事二三度に及ひたるなり。然るに豪商の常としておのれの内に出入するものは如何なるものにても自己に服せさるものはなく、假令馬を鹿なりといふとも皆唯々諾々たるものなれは、自然我意を恣まゝにするもの多かり。この豪商もこの類にもれざりけむ。是眞の下繪をよしとせさるにや、自ら是眞の家にいたりて。此間より度々下繪をつかはされしかとも未た落意せぬ所とて彼の下繪をとり出し、こゝはかくせられたり、かしこはかやうにせよと種々批難をなし、いつその事、此方の所へ金泥もて霞を描き丹頂の鶴を二三羽飛はされたしといふに是眞大に腹を立てゝ。是眞は下手なから蒔繪を職とするものなり、御身等の如きものに指圖を受くるものに非す、我には我の法あるなり、さやうに氣に入らすは御賴まれ申さぬ迄の事なりと少しも慮かる色なく斷乎として應せされば。彼の何事もわかいふ事は行はるゝものと思ひ居たる豪商も言葉はなくて這ふか如くに逃け歸りしといふ。（完）



雜　錄

遺珠顆々

將來と現在　バイロン

○宗教心ある人と宗教心なき人の區別は前者は將來の爲めに現在を減

牲にし後者は現在の爲めに將來を犧牲にすることさ是なり

友誼　シセロ

○人生より友誼を取り去るは世界より太陽を取り去るなり上帝の賜ものゝ中友誼ほどよきものはなく友誼程樂しきものはあらず

愛は名よりも　ナポレオン

○子を愛するの父には戰場の勝利も物の數にあらず人の情一たび起る時は榮光も唯幻の如きに過ぎざる耳

パーク氏の「理想の妻」

苦仙子

古來文人其配を擇ふに多くは薄倖にして、政治家の家庭往々其治まらざるを嘆ず、文人政客にしてパルクの如く其撰擇に於て多幸なり、又其家庭の和樂なるものは蓋し多からざるべし、氏は一千七百五十六年其二十七歲の時同鄕の國手クリストハアニユーゼント氏の女を娶りしが、夫人は眞に窈窕たる淑女、君子の好仇たるべき關雎の美德を備へ、嫺雅優靜にして、パークが苦學の勞を慰め、政治上の不平を和らげ、又議院政務の絶えざる憤鬪場裏より良人を救ひ出して、能く內を守りて交際に力を用ひ、パークの家に來る衆賓をして最も滿足の意を表して其家庭の幸福は羨欽せしめたりといふ、さればパークは常に語りて言へり、如何なる激憤痛慮ある時も一度吾家の軒下に入るや直ちにこれを忘れ去ると、氏は曾て此幸福なる結婚の紀念日に理想の妻となんいふ一文を綴り、題して　　の性質と稱し、これを夫人に與へて自ら其名を記入せしめんが爲めに特に空處を置きしが、其文辭巧妙にしてこれに押韻せば、恐らくは尋常詩人の擬古の排列よりは遙かに詩思を帶びたりといふて可なり、聊か試みにこれを譯出したり、もとより我にパルクの筆なく、又我にかゝる理想の妻とてもなければ彼が筆意を傳へて神に入ること能はざれとも讀者これを咎めそ、

理想の妻

いでやわれ理想の婦人綴り見ん、若し僅たりとも其粉本に同しき所あらば、われは異に懐しく思ふなり、もし世上果してかゝる婦人まことに存在するとあらば、其人こそは吾此文中の美人よりは遙にすぐれたる人なんめれ、其人こそは我書中の佳人よりは遙にいつくしむべき人なんめれ、

其人いと佳麗なり、されど其佳麗なるは唯姿態躰格顔容より來る美にはあらず、かの人の此等三のものをよく備へたるは言ふまでもなきことなから、吾心に深く感せし美はかゝる外形の美にはあらで、其心根のゆうにやさしく、物のあはれといふことをよくわきまへて、浮世のわろき風習に染ます、想ひやり深うして、そのうるはしき顔色を見れば曇なき淸き心の底まで想ひ見つべし、かの人は唯一回見たるだけにても得忘られじ、まして見れば見る程思の種の萠え出でゝ、何が故にかくまで心を動すかと自ら怪むなるべし、かの人の淸冷なる兩眼にはやさしき光充ちて、そのほゝゑむ時は人を熔かすはかりにかゝやけり、つねはその眼職事ある君子の監督するやうに働けども、そは權威を楯にしてさあるにあらで、全く德風の薫り高きやうなる更にゆかし、

其姿態は尺度もてはかりたらんやうに精緻にはあらず、そはあまりに精細なる模型にまかせて一點の違なきは、ほむべきことにはあれど愛すべきものにあらず、そを如何にとなれば、そのうちうは〳〵しき風趣に乏しければなり、かの人身材あまりに高からず、又低からず、そは人にもよるべけれど、大方人の好む所なれ、

かの人いとすこやかなり、されど其健かなるはあでやかなる所乏しきが爲めにあらず、かの人いとたをやかなりされど其柔かなるはかよわき所あるがゆゑにあら

ず、わざとなる化粧立よりは飾なき素顔こそ人の心をひくものなれ、かの人かゝるあだ心用ることなく、自惚の念とては微塵あることなし、其りゝしき所あるも其容貌をおそろしうはせで、かへりていよ〳〵えんなるところます心地す、かの人いとろうたけてまたけだかく、其笑顔は言はんやうなく愛らし、

聲はやゝ低けれど靜かなる音樂とも聞へつべし、よし公衆を醉はしむるまでの巧なきも、群集と社友とをわきまゆる程の人々を迷はしむるに足れば、これを聞かんとてかの人のほとり近く集まり來る人多かりぬべし、

其形態を記すことは又其心をも記すなり、そはかれはこれの影なり響なればなり、かの人の怜悧なるはその何事をも知らぬものなしといふにあらず、その撰び求むることのよろしきなり、かの人のかしこきはいと敏慧なる言葉をいだし、またいみじき業するよりも、其言はず爲さであるべきことにあだ口せず、無益のわざせぬことのまされるなり、かの人事物の良否をよく判てども其は理論をもてしかするにあらで、かしこき判斷によりてなり、多くの婦女子よき教育を受けたる人のなかにも好惡といふこと眞にはなれがたきものにて、これが爲めにはあまりにはしたなき擧動とも思はるゝこと多きものなれども、かの人其心根のやさしく寛忍なる、何事を心にかけぬ放逸の人なりとてかくまでに寛大なることは能はじ、また如何に貪婪なる人とてもかくまで精細なる人はあるべからず、

かゝる妙齢の婦女子にしてかくまで世上のことに明かなる人は又あるまじく、其世間知れるがためにかくまで其惡習に染まぬ靜淑の婦人は愈稀なるべし、其禮節の正しきはかのわづらはしき儀文より來りしにはあらで、眞實なる天性より流れ出でたるが如し、されば日頃かの人の素性教育を知る知らぬ人孰れも感賞せざ

るものはあらず、かの人心なき娘子輩の如くわけもなく親しき交際を結ぶことにのみ熱心せず、これ爭をかもし怨を結ぶもとゐなればなり、かの人其友を結ぶまでには長き間その人に注意して、いよ〳〵其人と契結ぶにいたりては其まじらは永久變ることとなし、かの忽ち遇ふて忽ち情交を結ぶといふたちの人の中には何處を求めてもこの人ほどにいく久しき歲月の間其交情の増すことあるも減ずることなき人は一人だもあらじ、かの人如何なる人より惡ざまに言はるゝとも敢てあらがふことをなければ、又其激賞に預りしとて其判斷を失ふまでに喜ぶことはあらず、そは過激なることは其靜謐なる性情と其温厚なる習德とに反すればなり、かの人心剛に物に動せねどこれがために婦女子の性情を失はざることは恰かも堅牢なる大理石の磨いで益光澤を發するが如くなり、かの人男性の俊英と稱する人も及ばぬ美德を具へ、また心より人を撫くる威儀ありて、其たをやかに又えんなる中に見ゆる瑕疵さへ愛着の種となるなれ、

時事一斑

帝國議會停會

衆議院の議事現行條約厲行說に入る。開會十八日にして、去る十九日議會は停會せられたり。詔に曰く、

朕帝國憲法第七條に依り十二月十九日より十二月二十八日迄十日間帝國議會の停會を命ず、

御名御璽

政治の世の中

紛々たり擾々たり、十二月は例によりて政治の世の中なり。政治界の外に事なきにあらず、政治界の中事あるなり。

歲事に暮る

稚兒が待ちし新年は來らんとす。老人が惜みし歲は聿に暮れんとす。待つもの、惜むもの、悠々たる世上限りなし。ア、青陽逼二歲除一。

明治廿六年に別る

『百しきの大宮人もいともなき年の暮ともなりにけるかな』行途人忙はしく、明治廿六年も今は暮れけり。」一年の計は元日に在り、一歲のしめくゝりは大晦日に在り、海道を行く客が函山に攀ぢて一たび回首する如く、一年を旅するものは歲末に至て且つ年内の行程を顧み、其爲す所のもの成す所のもの果して歲始の豫定を愆らざりしや否やを考較するなるべし、吾人亦今然らざる能はず。

顧ふに家庭に於ける明治廿六年は極めてじみなる年なりしと雖、我決して賴もしからぬ年にてはあらざりしなり。たとへ一方には老朽せる社會の一部が落葉紛として、地に落ちたりしにもせよ、一方には家庭の新樹藹として多望の萌芽を含み、一たび陽春の德光を待て發生せんと欲するの生意ありたり。吾人は言ひき、

一時狼の如くに狂ひまはりし保守的反動の寒威も、今は端りなく和暄なる進步的淑氣の一陽來復するに逢ひ、學校は引きしまりぬ、社會は自ら顧みぬ、世は勢力蓄積の時となりぬ。

と、吾人は實に此年の元旦に於て斯く言ひき。而して幸に此の豫言は愆らずして、女學界の風雨針たる各女學校の如きは、漸く再び其生徒の數を增加し來らんとするに至れり。亦喜ぶべき新氣運にあらずや。

請ふ試に事實に就て之を一視せよ、東京婦人矯風會は昨年末に於て新に規約を定めて大に爲すあらんとせしもの、遂に此の春に至りて日本婦人會を作り、秋に及びて之れが機關たる婦人矯風會雜誌を發兌するに至れり。

敎育界に於ては三月の初に井上毅氏河野敏鎌氏に代て

文部の長官たるに及び、吏人的なりし文部宗を改革して稍實用的國民的ならしめんとなし、曲學の魁首加藤弘之氏屏けられて濱尾新氏大學總長となり、革命の手こゝに着けられてより、秋に及びで學政の方針定り、八月遂に大學令の改正を見るに至りき。

九月は修身教育の大旨を天下に告げ、當務者の黜陟を行ひ、宿弊改革の實漸く擧らんとして嘗て文部宗の本山たりし辻新次氏の大日本教育會及び伊澤修二氏の國家教育會の反抗に逢へり。而して二派は相連合して『人を射ば先づ馬を射よ』と叫びき。

此の爭鬪は久しく繼續せられぬ。

大日本教育會は首として其機關雜誌を政治雜誌として更に大に反抗を試みんとし、伊藤博文伯以下の各大臣は之が名譽會員を辭し、文部大臣は最後の打撃として強迫的訓令を發して之を脅かせり。是に於て辻伊澤の二氏和を井上大臣に請ひ、事始めて平らげり。大臣遂に實業補習學校の規程を令す。

教育界の事未た全く同意を表する能はざることなきにあらずと雖、文部の新政が國民的實用的なるは大に喜ぶべき事にして、こゝに特筆大書するに足ものなり。

亦是れ新氣運の來り至る一徴候のみ。

而して社會は三月に於て墨田河畔に郡司大尉を送り、五月に於て不忍池頭に福島中佐を迎へ、時ならぬ祭典を擧け以て新氣運が世の冒險事業を嘉みする意を示せり。

ア、廿六年に於ける多望なる半面は實に此くの如くなりしなり。

而して他の半面は、

婬猥殘酷なる記事の小新聞に滿たさるゝもの猶絶ず、忌まはしき探偵小説世に翫はれぬ。

國家教育の名義としては、井上哲次郎氏『宗教と教育』とを論じて一時の問題となり、高橋五郎氏等との

間に相罵りあへりき。之を春夏の交の事とす。
秋に至りては貴族家庭の破綻あらはれ、俗間の大問題たる相馬事件世に噂され、延て星亨氏の一身に及び之に對する醜事としては政治界の腐敗漏れて農商務省は醜窟の如くに目ざゝれ、後藤大臣齋藤次官等其中心に置かれぬ。人皆歎せり『ア、世は澆季なる哉』と。
然れども一方に此くの如くに幾多の醜事が世に曝露せるは、則ち他方に於て世道人心のひきしまり來る所以にして、亦雨降て地堅まるものなりき。
果然、社會の制裁は彼等を容れざらんとりせ。
帝國議會十一月二十五日に召集せられ、廿八日に開院せられしが、衆議院は劈頭第一に星亨氏を打擊したり。
彼は一週日の出院を停止せられし後、遂に議院外に放逐せられぬ。
而して後藤大臣等に向ての打擊は官紀振肅てふ一新語を以て加へられ、議會は停會せられて今や將にいづくんか定まらんとしつゝあり。
之を要するに明治廿六年は半面暗黒に半面光明なる年にして、而して其暗黒なる半面は漸く消ゆべきの半面其光明なる半面は漸く長すべきの半面なり。吾人の其間に處する、自ら其何の功勞ありしやを思はずといへども、吾人は喜ぶ、世の吾人を迎へて我が雜誌をして生成せしむるの速かなることを、吾人と其志を同ふするもの〻實に世に多き徴證にして、吾人が此の望みありたる年に別るゝを事ともせず、而して更に大に望みあるべき年を迎ふるを樂しむと共に、世も亦吾人と同じく之を樂まんとすることを。復た歳暮の歎をなすの暇とてはあらさるなり。

三版

最暗黑之東京

定價十三錢
郵稅四錢

◎早稻田文學の評に曰く『最暗黑之東京』此の面白げなる名稱の而して讀みて實に面白き一書は今春長らく『國民新聞』紙上に現れて江湖の喝采を博せしもの今度更に增加して出版せるなり著者乾坤一布衣實の名は松原吉五郎氏嘗て身を一貧兒に窶し彼等と伍する事五百有餘日業を改むる事三十回仔細に細民の狀態を觀察し下層社會の內情を探りてこれを直筆せしなり勞働社會の種類、等級、交際、合詞、生計、住處、家屋、家具、食物等より飲食店、居酒屋、の內幕、蹈市、朝市、夜店、古物買の實情、無宿坊、蓄妻者、獨身者の境涯に至る總て三十五項悉く實地の觀察より來れるが故に讀み去り讀み來たれば宛然實況を見るが如き思あり最下層の情況を知らんとするものゝ好參考かゝる新方面に新精神の眼を注がんもの今の新聞記者中『國民新聞』記者を除いて殆ど稀なり或はいふ乾坤一布衣は二十三階堂主人也と

發兌元　東京京橋區日吉町四番地　民友社

高木伊作著　情巧なる肖像系圖及年譜を添ふ

十二文豪第五卷

ゲーテ

定價十八錢
郵稅四錢

◎護教　異文の國の人を寫すは極めて難きものあり而して君の之を文字に行る綽々餘地あるが如し是豈百鍛千錬の果にあらざんや此裏苦心身之れを驗する者に非ずんば知る能はざる也

◎東京日々新聞　其性行其氣品其學問其事業を敘し盡して餘蘊を殘さずゲーテ氏の面目躍如として一篇の中にあり文章亦甚だ精練にして著者の苦心を見る

◎讀賣新聞　筆法絢爛にして敘說精彩あり

◎日本人　ゲーテが性行の大概を見るに於て不足なし

◎二六新報　著者自ら云ふ『ゲーテは吾人に勇氣を敎ふ云々』と而して此書實に此勇氣を以て成されたり

發兌元　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

クリスマス

西洋手遊人形

新形カード

上等着

いろいろ

手遊いろいろ

新橋金六町

關口商店

家庭雜誌

○毎月二回十日廿五日發兌

定價	郵稅地方共
一冊　金五錢	金五錢五厘
半年（十二冊）前金五十錢	金五十六錢
一年（廿四冊）同金一圓	金一圓十二錢

○廣告料一行（廿四字詰一回ニ付）金八錢

○本誌御注文ハ前金爲替向所ハ芝口郵便支局

發行兼印刷人　垣田純朗
編輯人　塚越芳太郎

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　家庭雜誌社

明治廿五年九月十四日遞信省認可

徳富猪一郎著

吉田松陰

十二月廿三日より發賣
定價五拾錢
郵税六錢

◎題して『吉田松陰』と云ふも、其實は維新革命前史論たり。徳川幕府は、『何故』に顛覆したる乎、『如何にして』顛覆したる乎、本書は幾分か説明したりと信ず。

◎松平越中守、水野越前守、阿部伊勢守、井伊直弼、寛政の內を本としたる改革、天保の外を主としたる改革、弘化嘉永の變通的政略、安政の復古的政略、其の人物、其の事業、擧げて此の中に存す。

◎藤田東湖、佐久間象山、横井小楠、敵愾的精神、國防的經綸、開國的識見、尊王的攘夷、開港佐幕、公武合躰、當時の巨人、當時の活題目、擧げて此の中に存す。

◎若し夫れ本題の主人公たる吉田松陰に到りては、著者滿腹精神の注傾する處。其時勢、其の境遇、其の血統は、遂に彼が如き人物を作りたるを説き。更らに家庭におけ る彼れ、天下の士としての彼れ、革命家としての彼れ、教育家としての彼れ、其他總ての彼れ、描き來りて紙上に血あり、聲あるや否やを知らざれども、決して藥人形、土偶の類にあらざる可し。

◎嘗て『國民之友』に掲げたるものを増加する十の七八、删るもの十の一二、本來の面目一新したるを覺ふ。松陰の妹婿にして、其の親友たる楫取男爵曰く『事實御考據の詳密なるは、喙を容るゝ所無之』と、其の孟浪杜撰にあらざるは、幾分か知るに足らむ。

◎本書は更らに吉田松陰の肖像、久保田米僊氏の實寫せる松陰神社、松陰墳墓の圖を添ふ。又た蹈海失敗の禍案たりし佐久間象山の松陰を送る詩。及び松陰東北日記、松陰より横井小楠に與ふる書簡。長州の先輩村田清風の詩。何れも石版刷にて、其の眞蹟を寫したるものを附載す。快心洞目すれば、當時の形勢歷々として眼中にあり、維新革命前の先達偉人、冉々として逼るを覺ふ。

發兌元　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　秀英舍印行

復刻版 家庭雑誌 第1回配本（第1～5巻）

1986年10月20日 発行

定価 30,000円

発行者 高橋 治

発行所 不二出版(株)

東京都文京区本郷5-28-3

〒113 ☎03(812)4433

印刷所 ワールド印刷

製本所 吉田製本工房